

評価キット

別冊資料

1. **DLA**〈読む〉レベル別テキスト
2. **DLA**〈聴く〉映像(DVD)

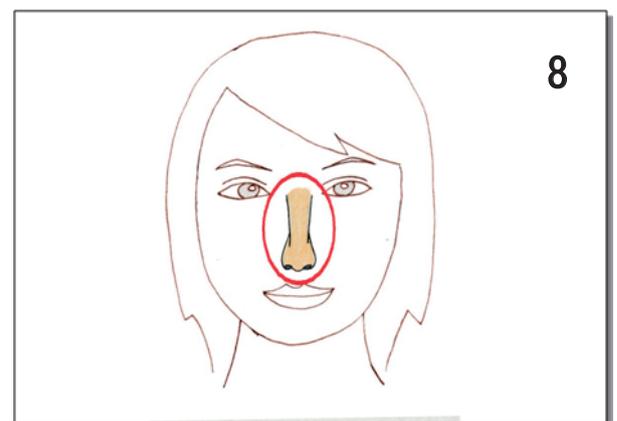
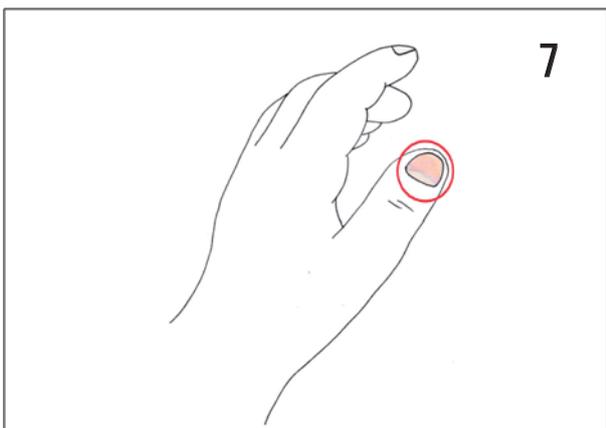
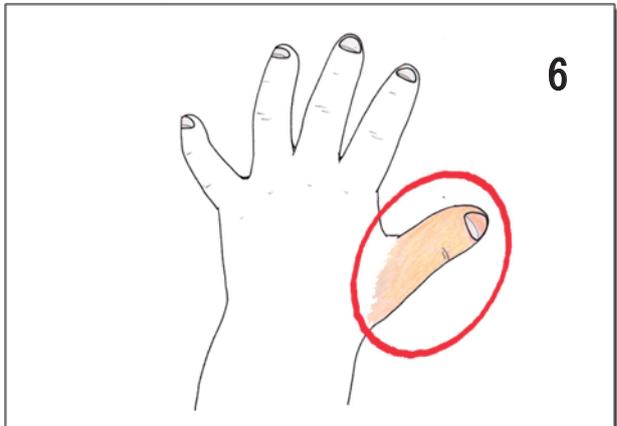
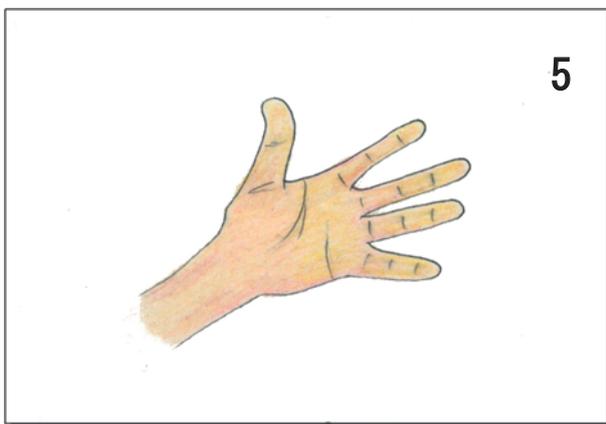
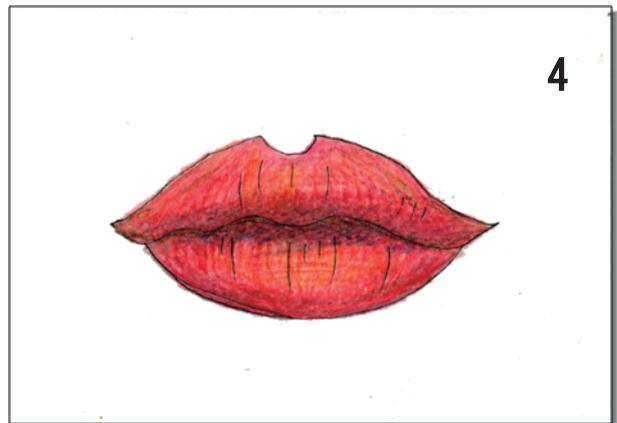
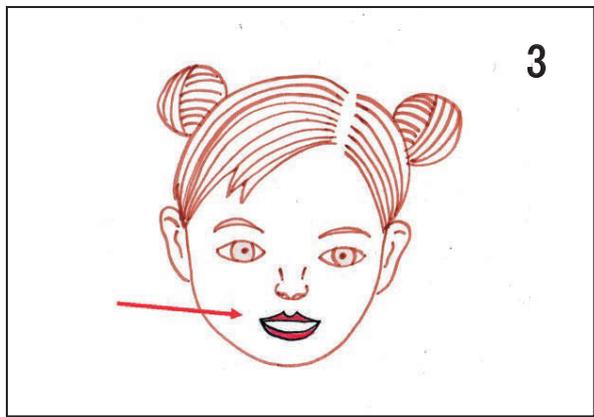
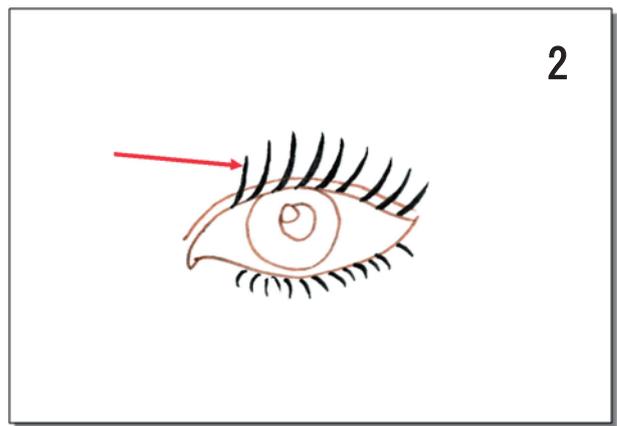
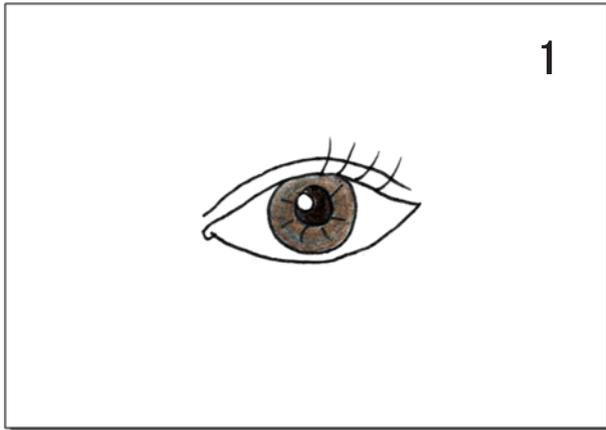
巻末資料

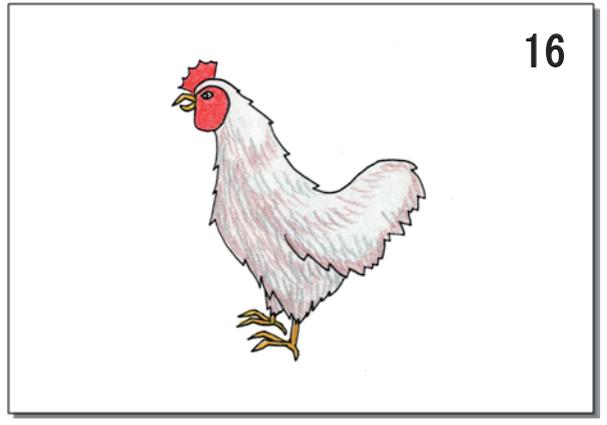
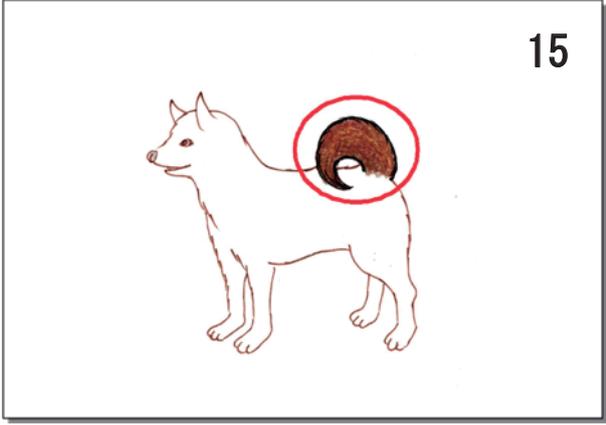
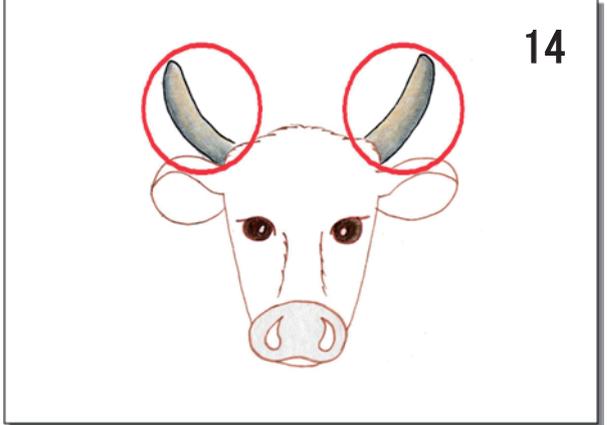
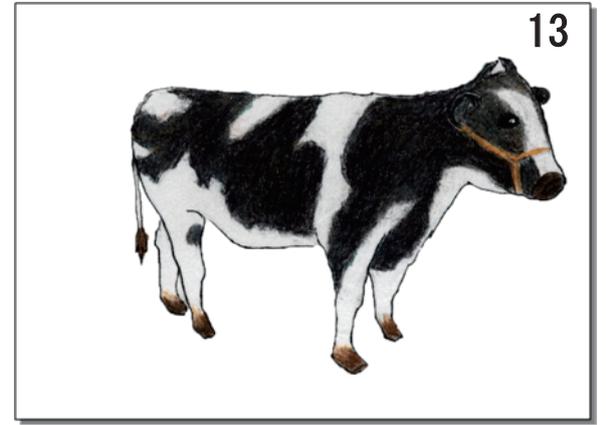
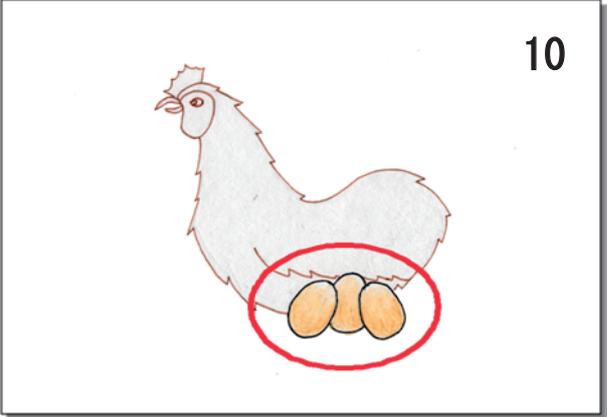
1. **DLA**〈はじめの一步〉語彙カード
2. **DLA**〈話す〉基礎カード(ピンク)
タスクカード(イエロー)
認知カード(ブルー)
3. **DLA**〈書く〉作文課題
4. **DLA**〈書く〉作文用紙
5. **DLA**〈聴く〉映像(DVD)スクリプト
6. **DLA**〈聴く〉視覚補助教材(キーワード)

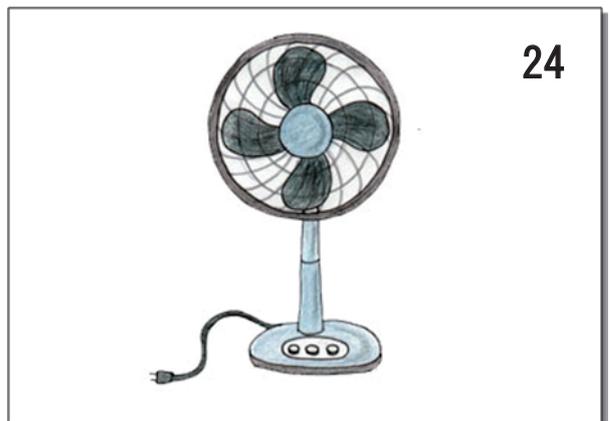
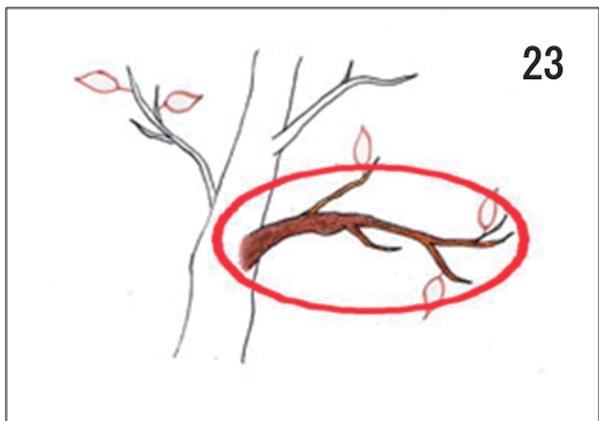
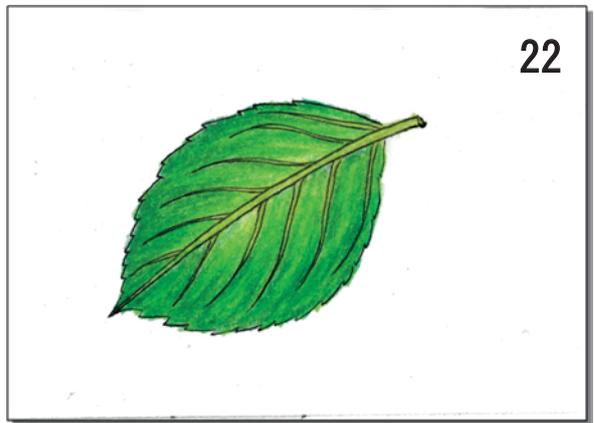
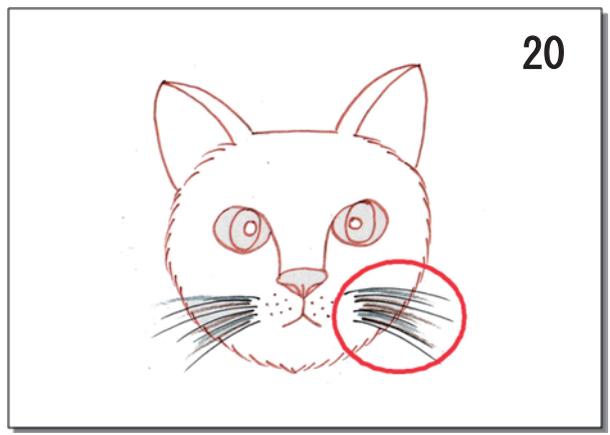
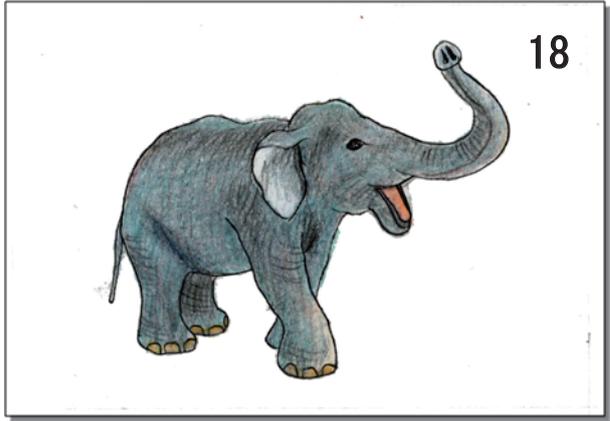
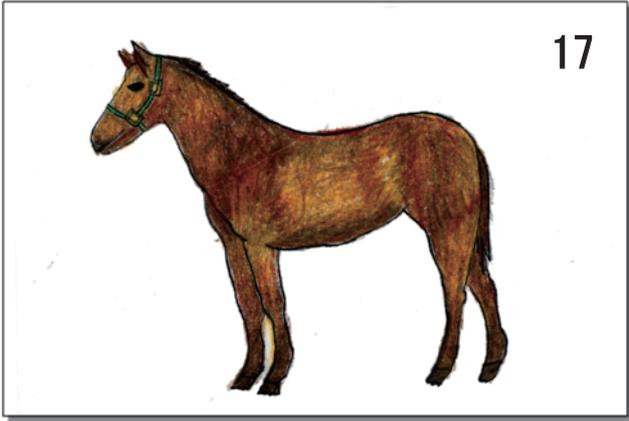
巻末資料の使い方

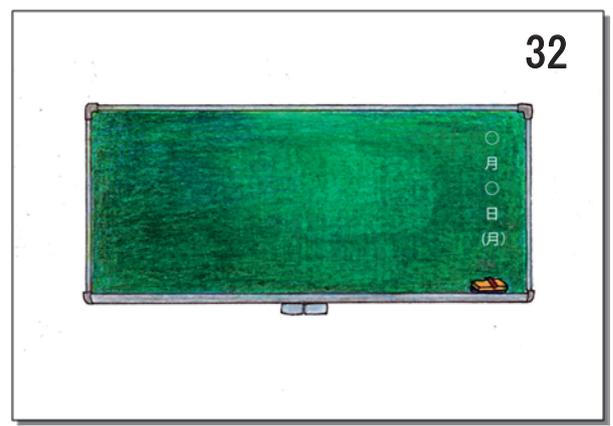
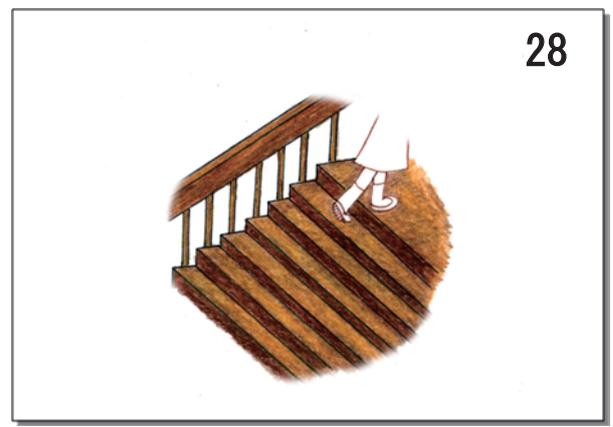
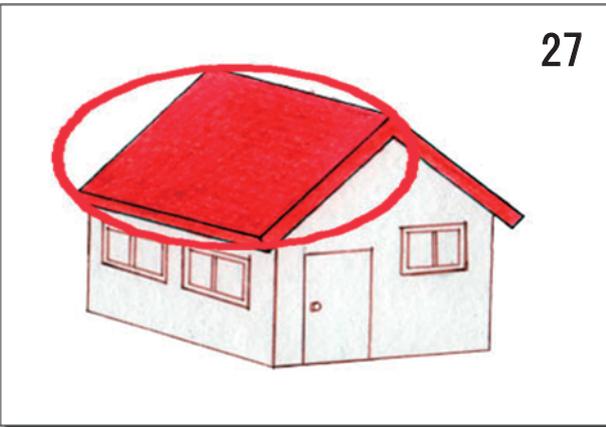
1, 2, 6はカラーコピーをして切り分け、台紙に貼るなどして繰り返しお使いいただけます。
3, 4は必要枚数を拡大コピーしてお使いください。
また、文科省のHPからプリントアウトもできます。

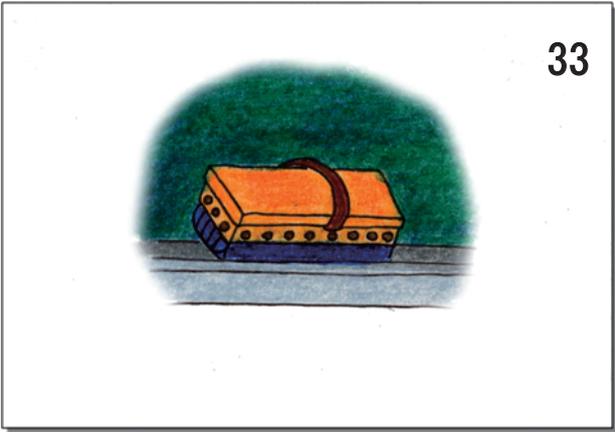
1. DLA <はじめの一步> 語彙カード



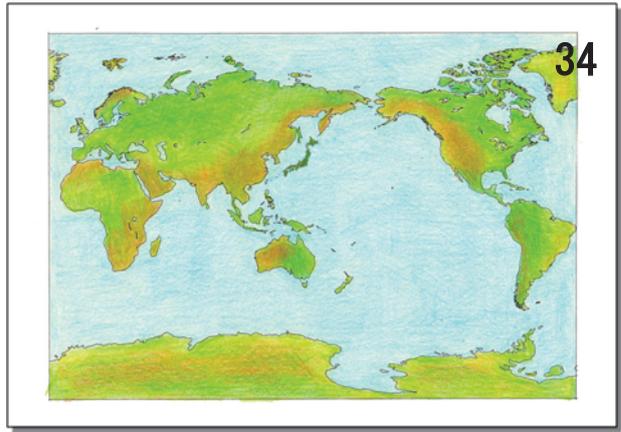




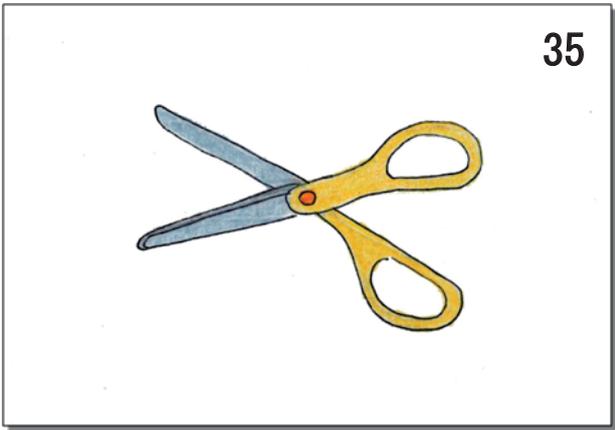




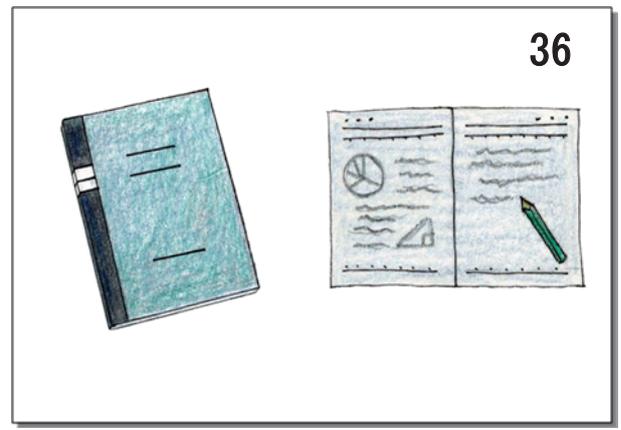
33



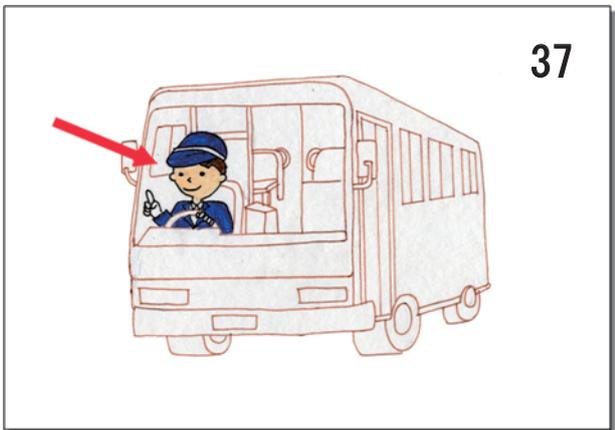
34



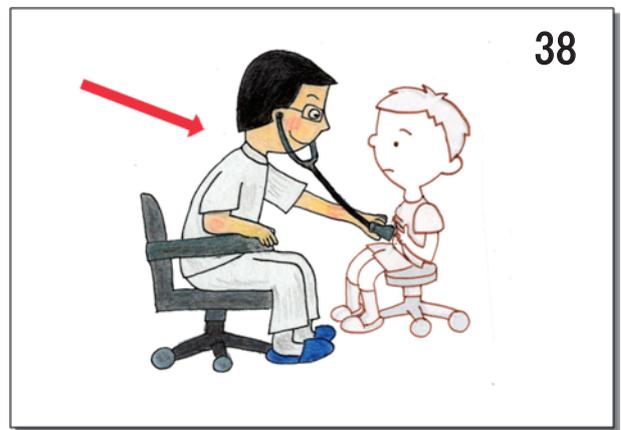
35



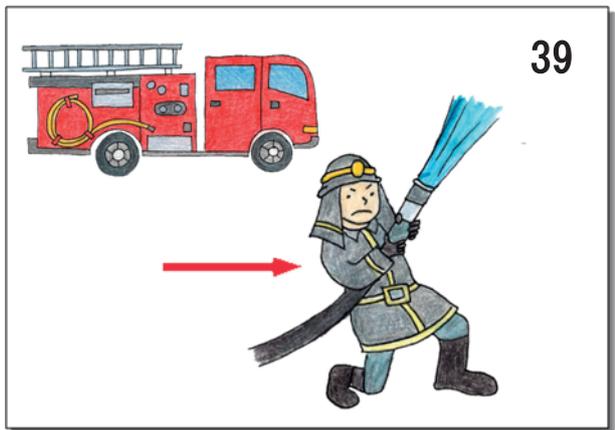
36



37



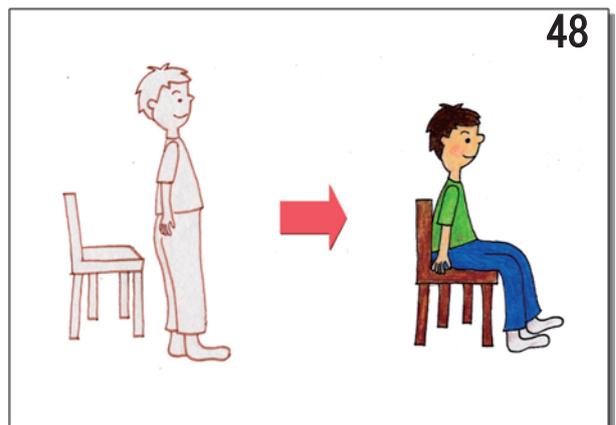
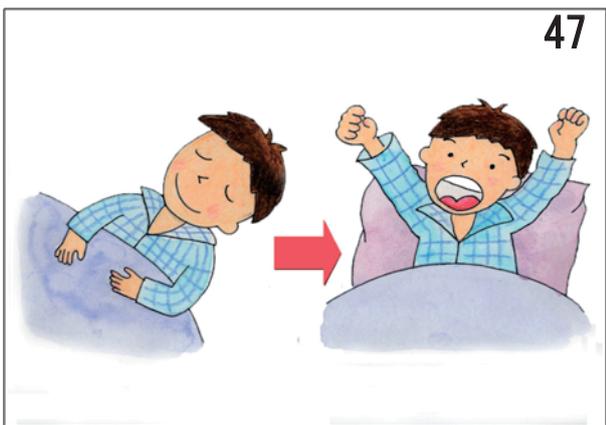
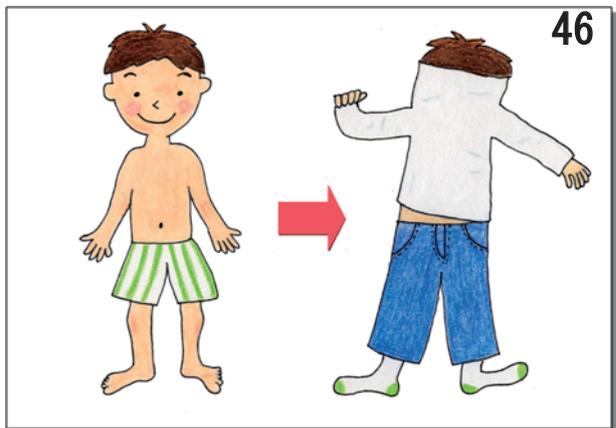
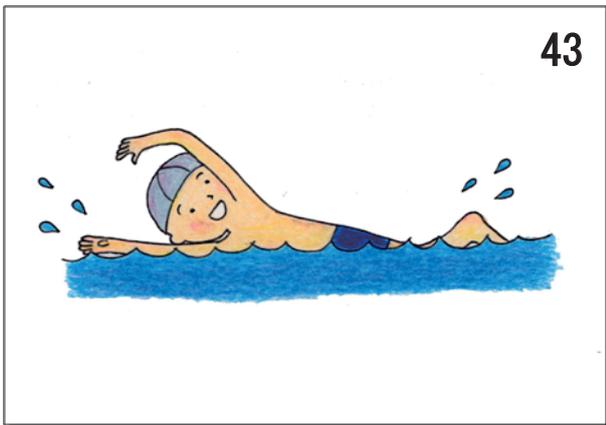
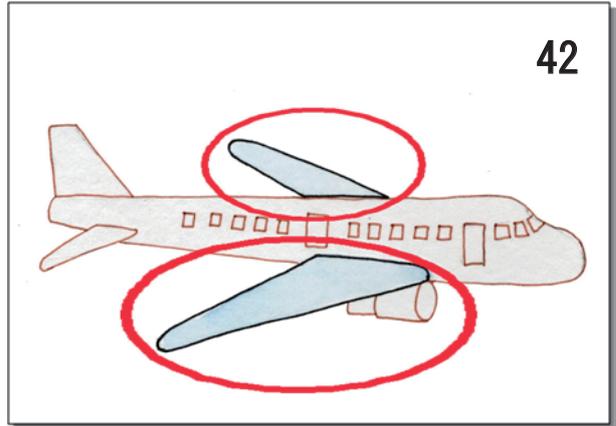
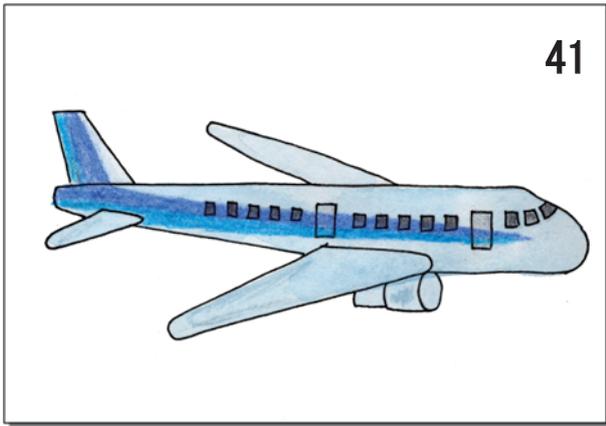
38

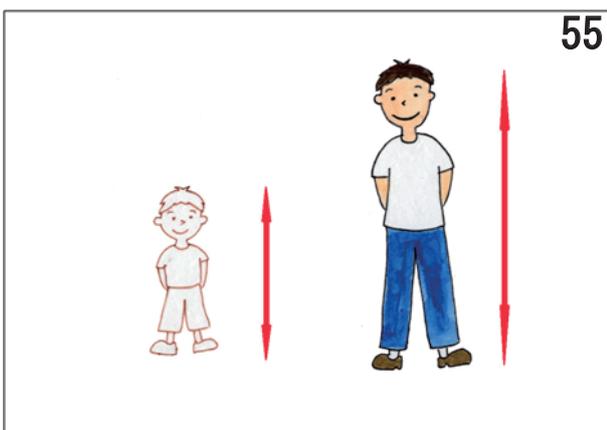
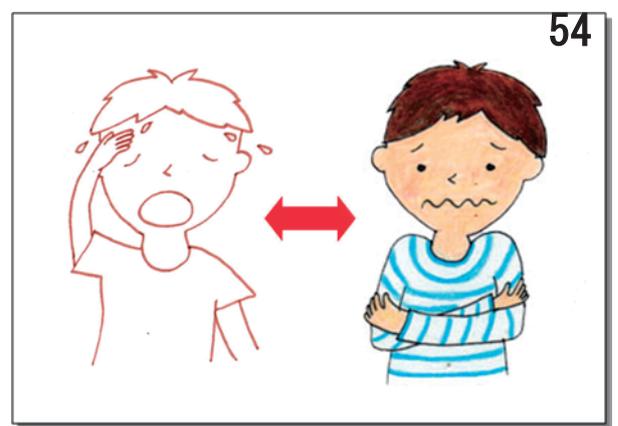
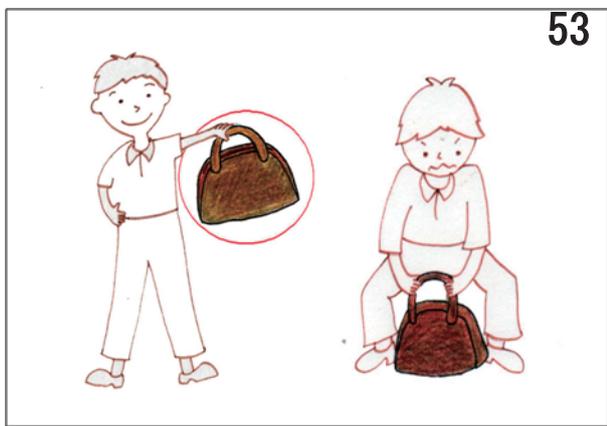
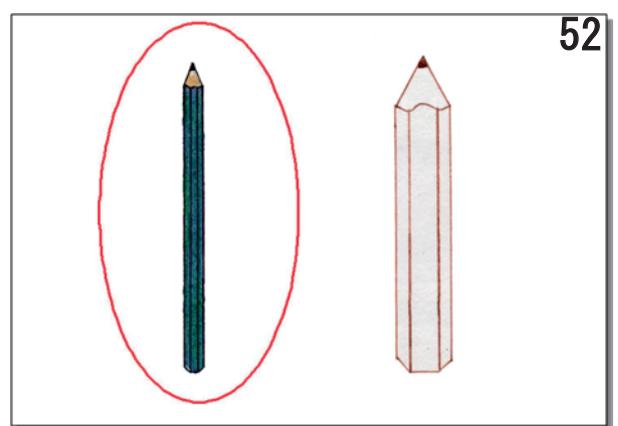
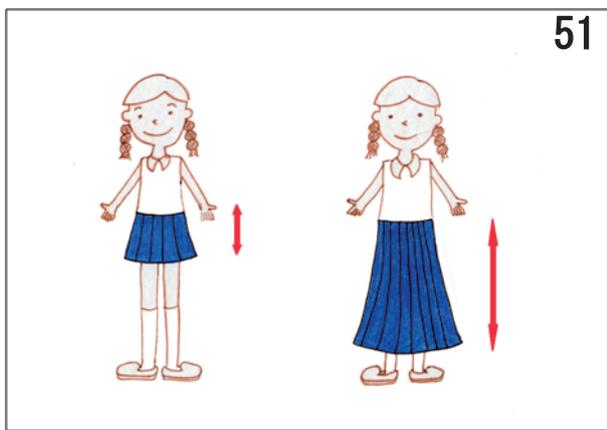
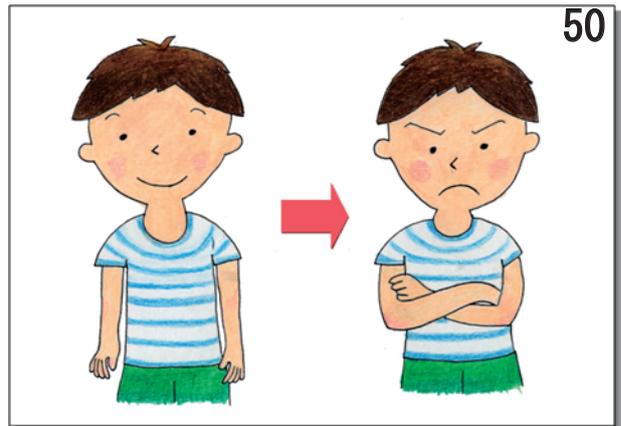


39



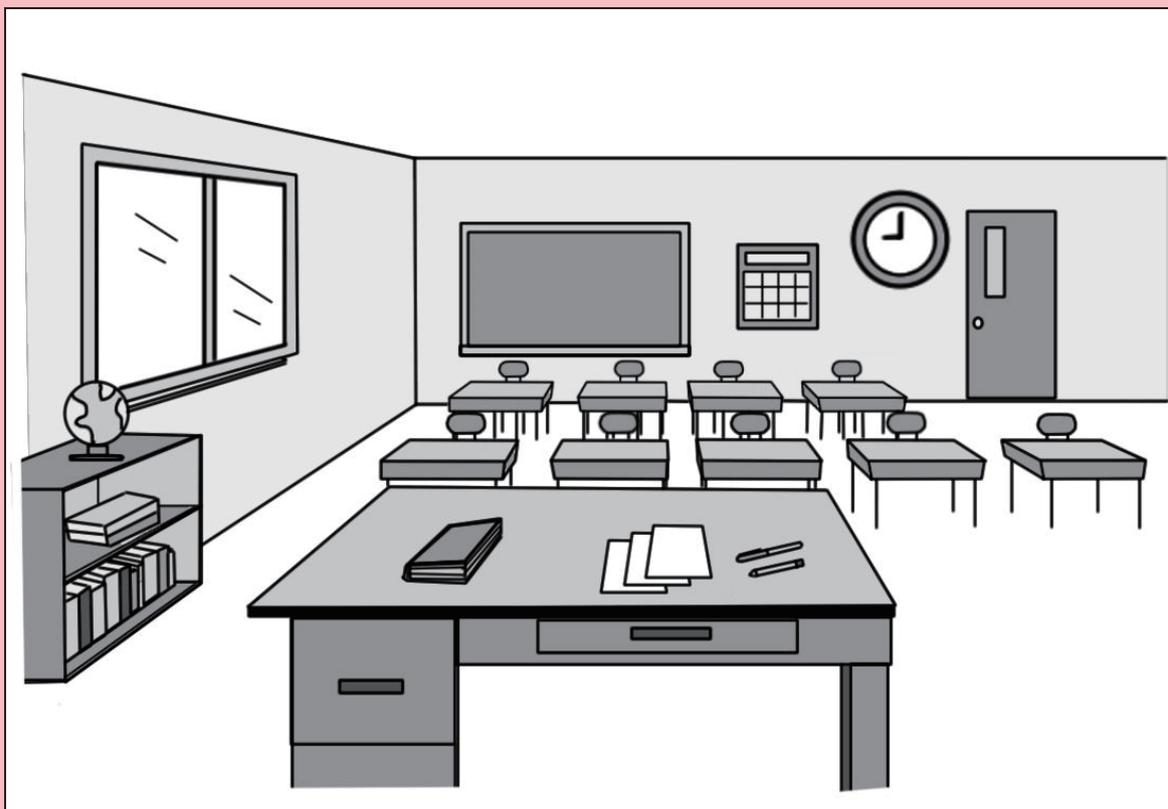
40



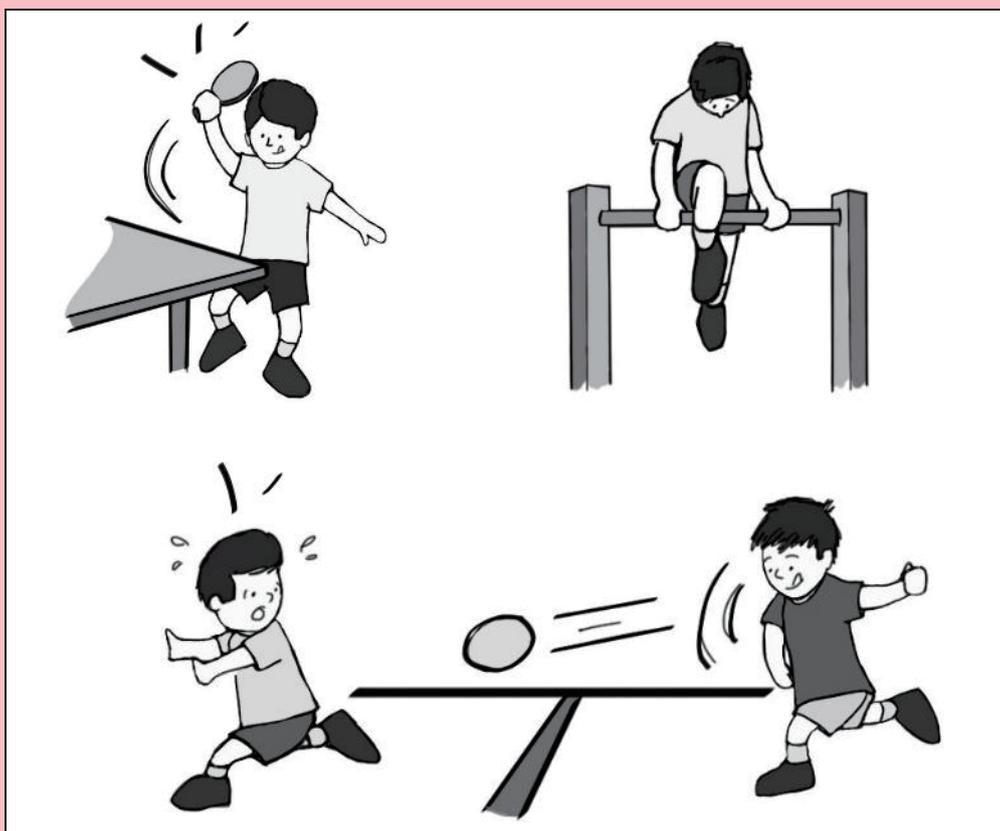


2. DLA <話す> 基礎カード

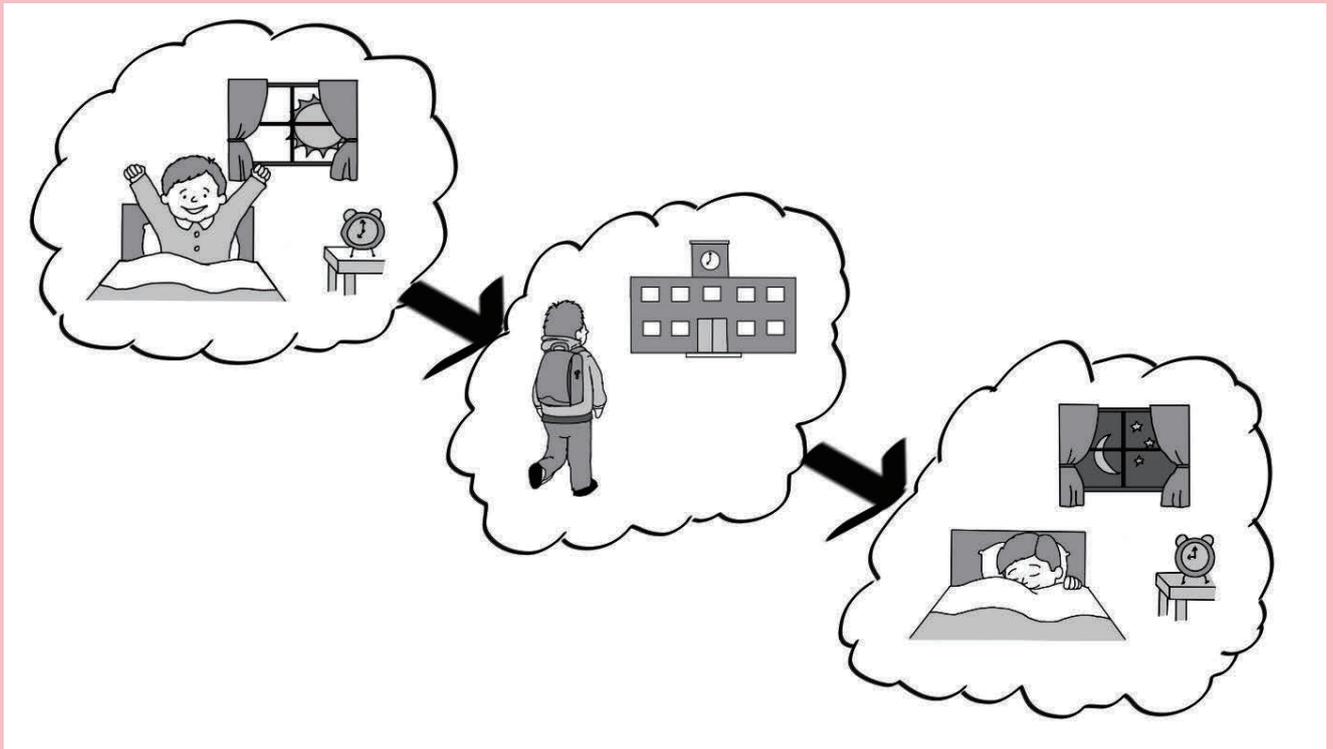
(1) 「教室」



(2) 「スポーツ」

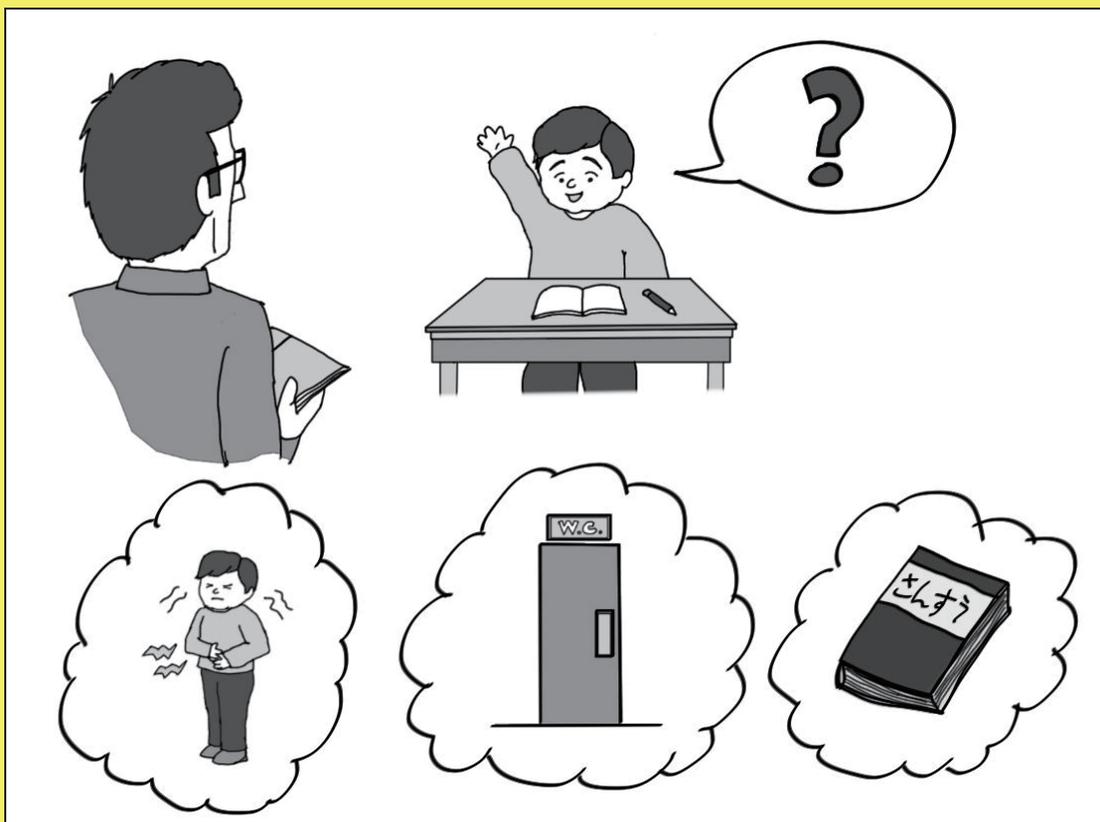


(3) 「日課<起床><登校><就寝>」

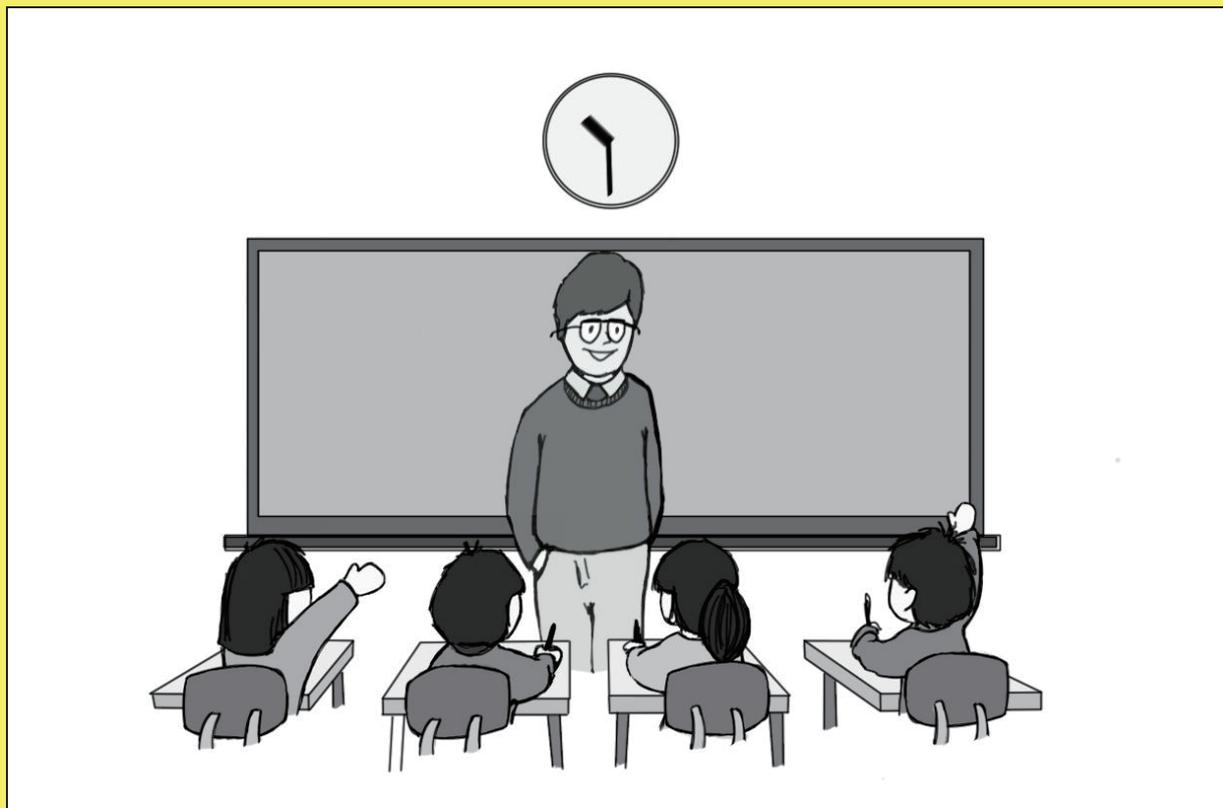


タスクカード

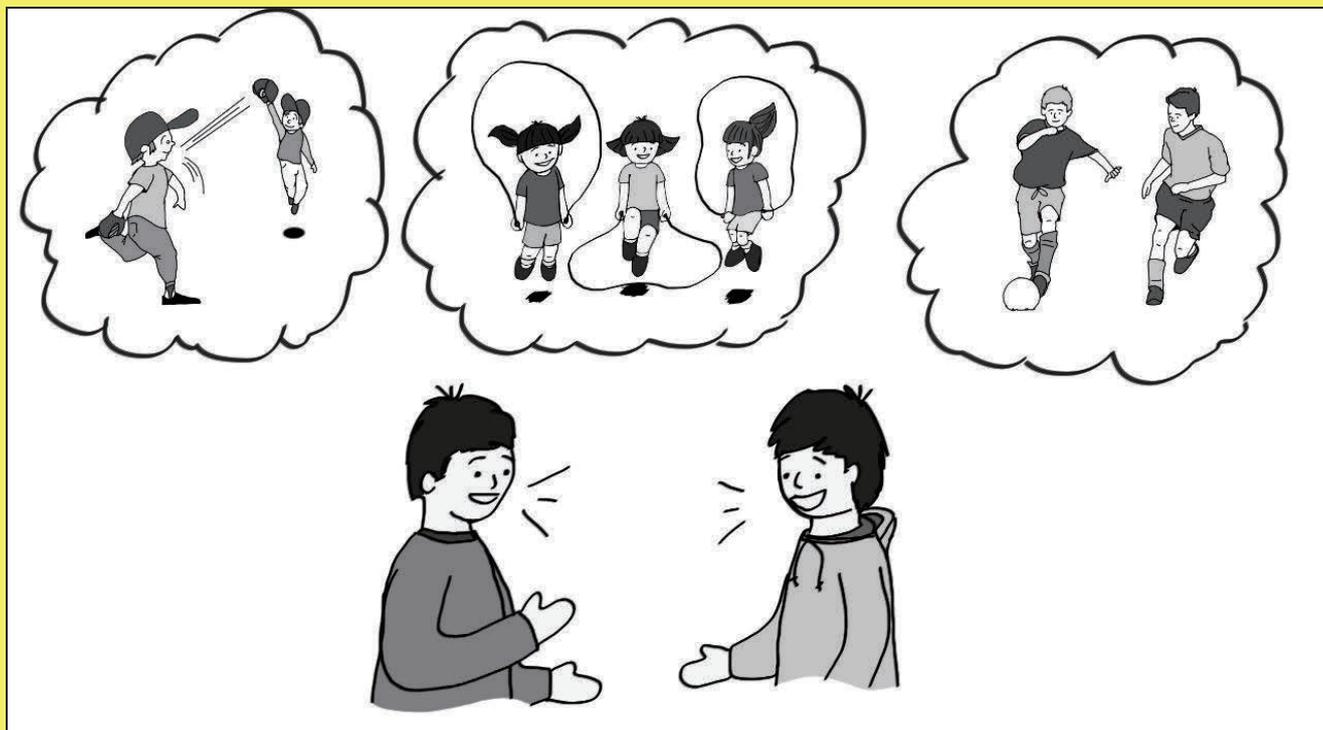
(4) 「先生に質問」



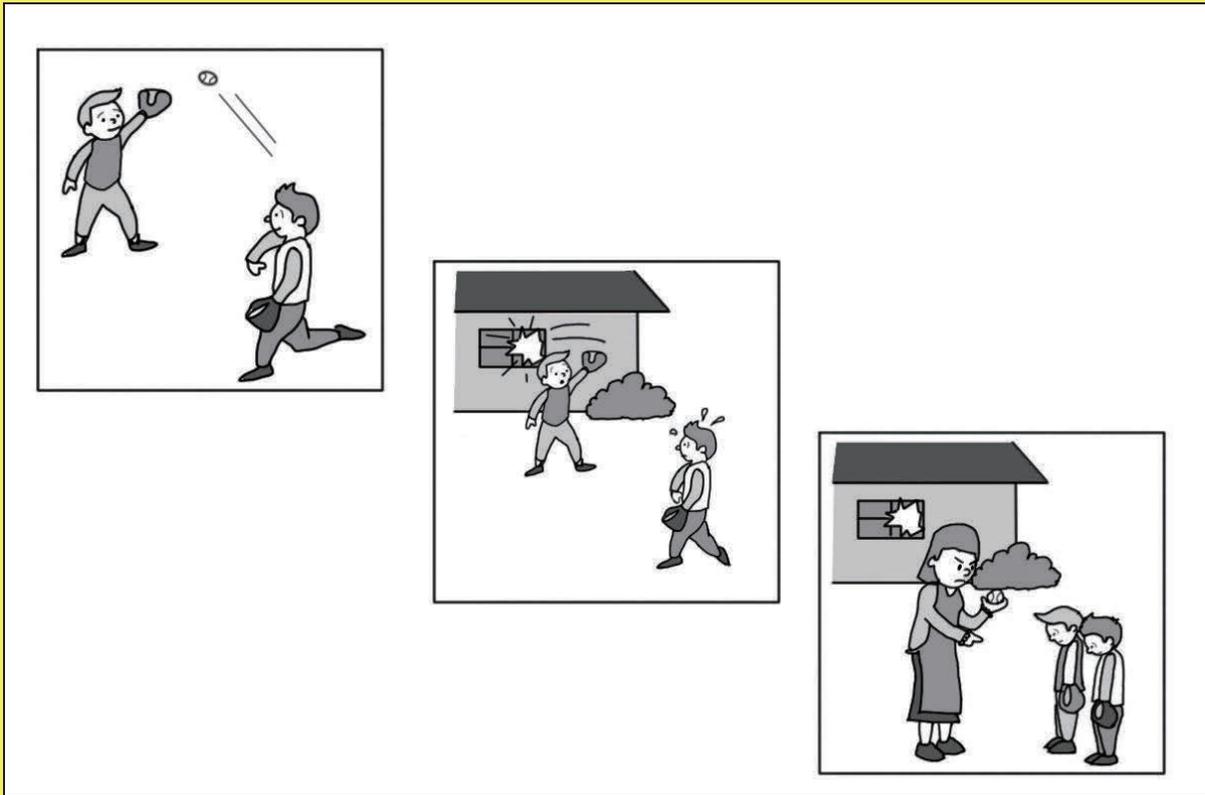
(5) 「新しい先生」



(6) 「友達を誘う」



(7) 「キャッチボール事件」



認知カード

(8) 「お話」



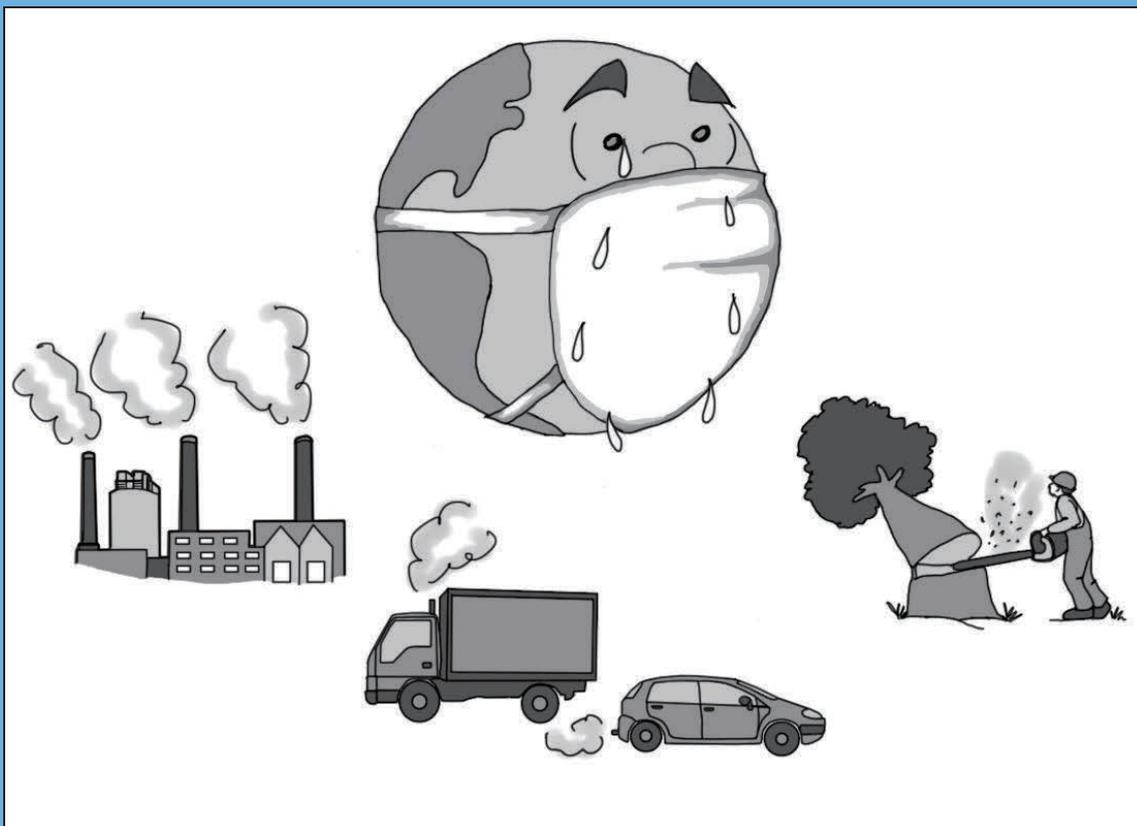
(9) 「消防車」



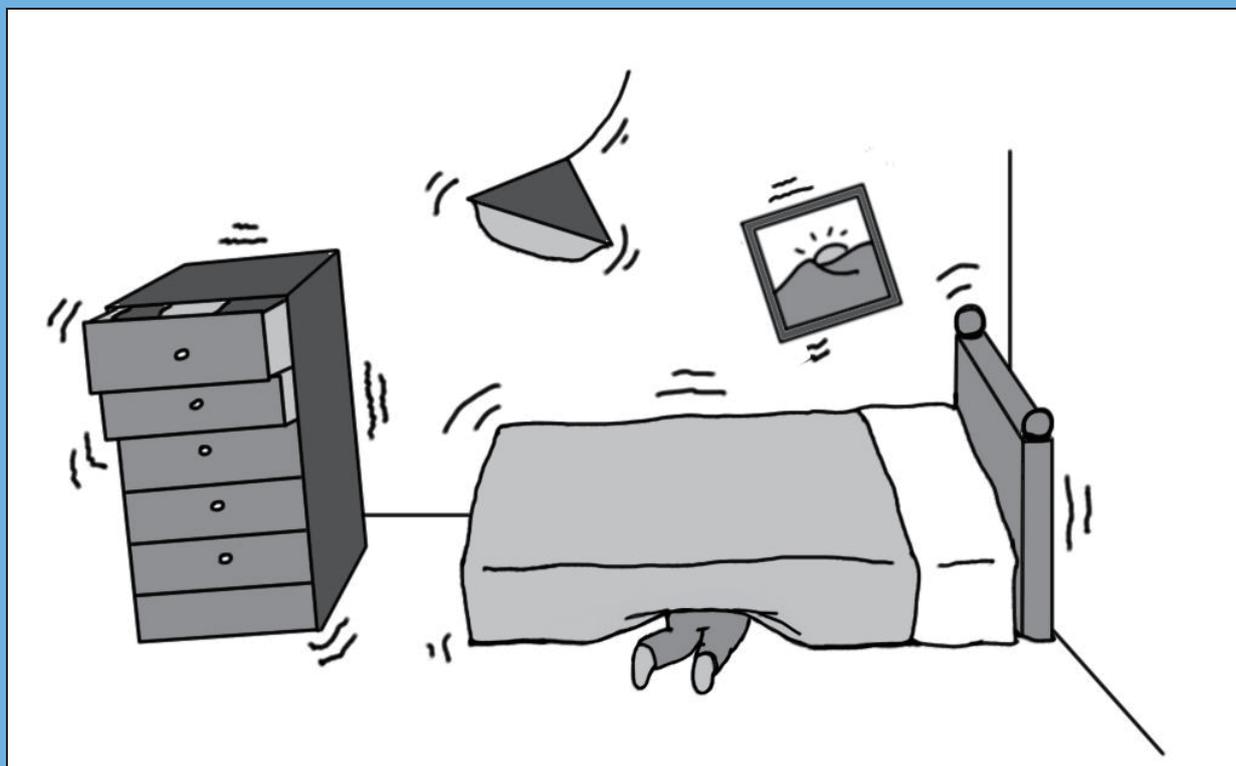
(10) 「キャッチボール事件の報告」



(11) 「環境問題」



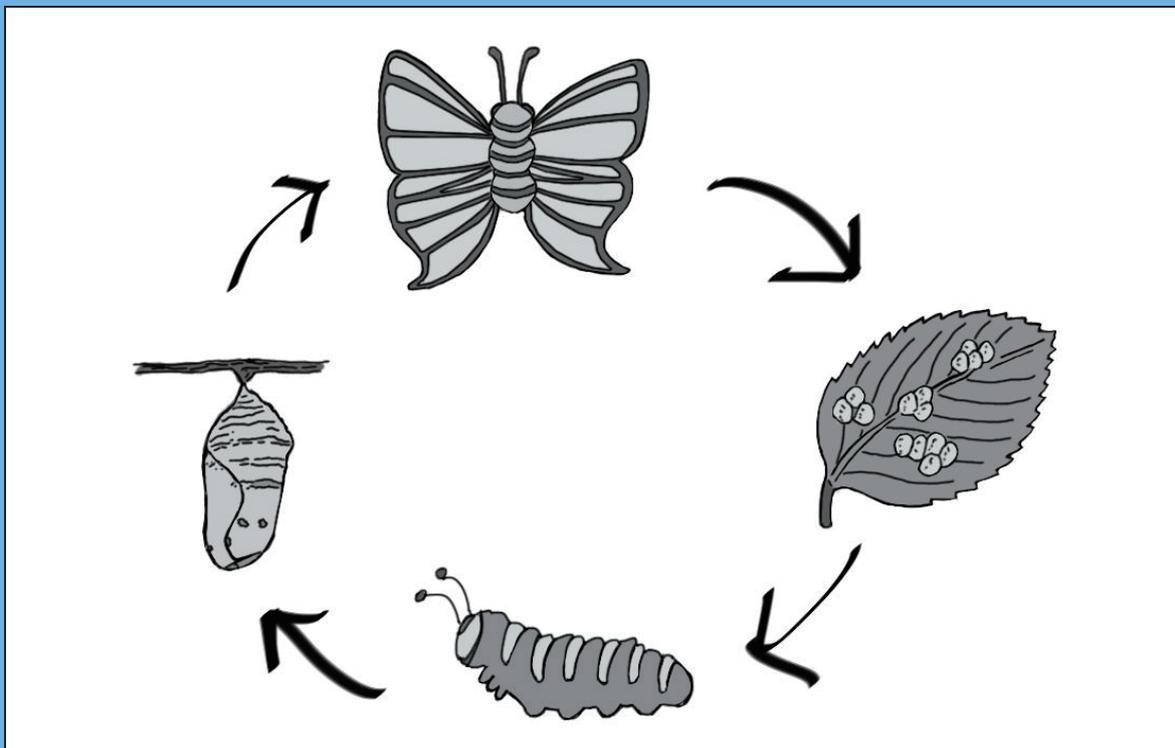
(12) 「地震」



(13) 「水の循環」



(14) 「蝶の一生」



メモ

学校紹介
がっこうしょうかい

あなたの学校がっこうについて紹介しょうかいしてください。
今の学校いまでも、前の学校まえでもいいです。

四百字以内よんひゃくじいないで書いてください。
時間じかんは三十分さんじゅうふんです。

メモ

日本の〇〇
にっぽんの〇〇

日本がいくと外国くわいこくを比べて、違うちがところを説明せつめいしてください。
〇〇は自由じゆうに決めてきてください。

四百字以内よんひゃくじいないで書いてください。
時間じかんは三十分さんじゅうふんです。

メモ

メールと手紙てがみ

気持ちきもちを伝えるつたのにメールと手紙てがみ、どちらが
いい
おもうか、五百字以内ごひゃくじいないであ
なたの考かんがえを書かきなさい。

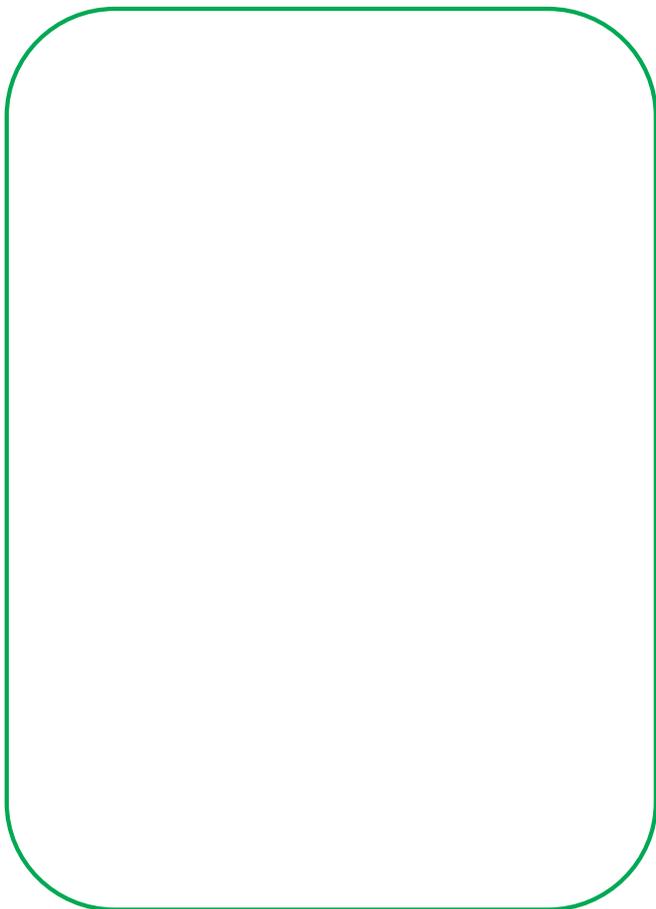
じかんさんじゅぶん
時間三十分

メモ

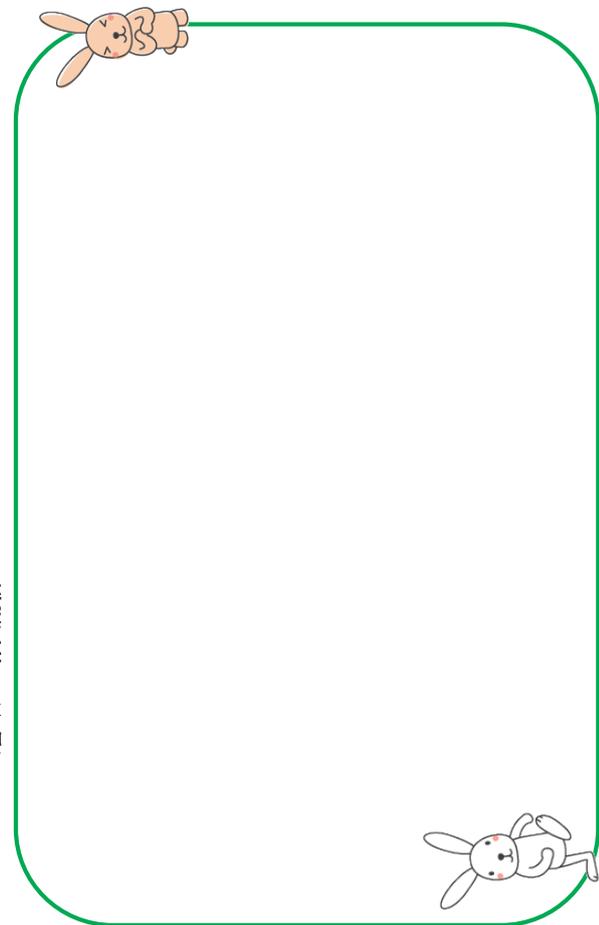
携帯けいたいで読よめる本ほん(電子書籍でんししょせき)があれば紙かみの本ほんはいらない？

携帯けいたいで読よめる本ほん(電子書籍でんししょせき)があれば紙かみの本ほんはいらないと
いう意見いけんについてどう思おもうか。理りゆう由ゆうとともに六百字以内ろっぴゃくじいないで
述のべよ。

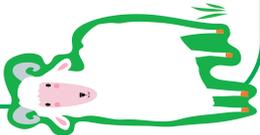
じかんさんじゅぶん
時間三十分

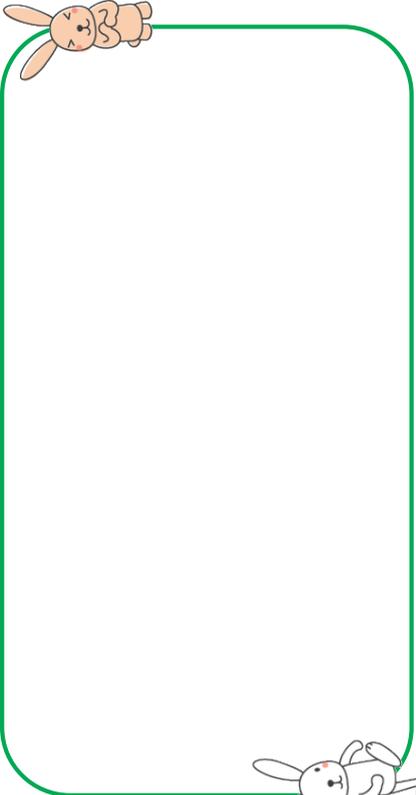


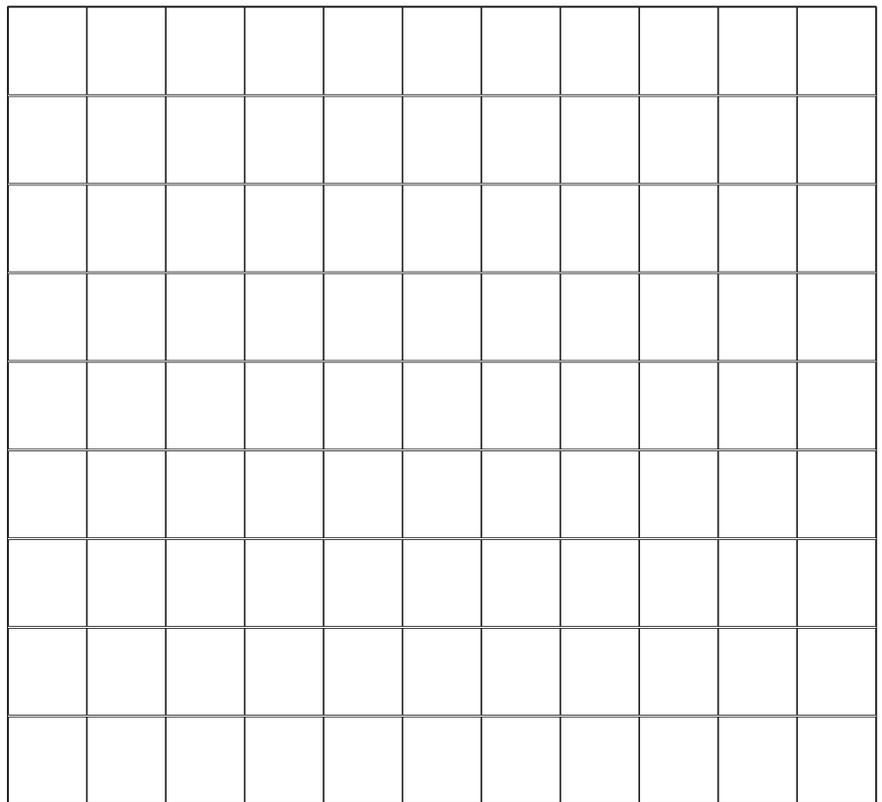
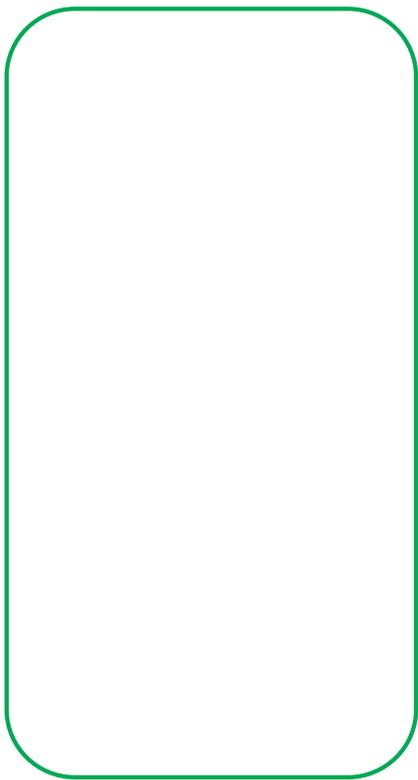
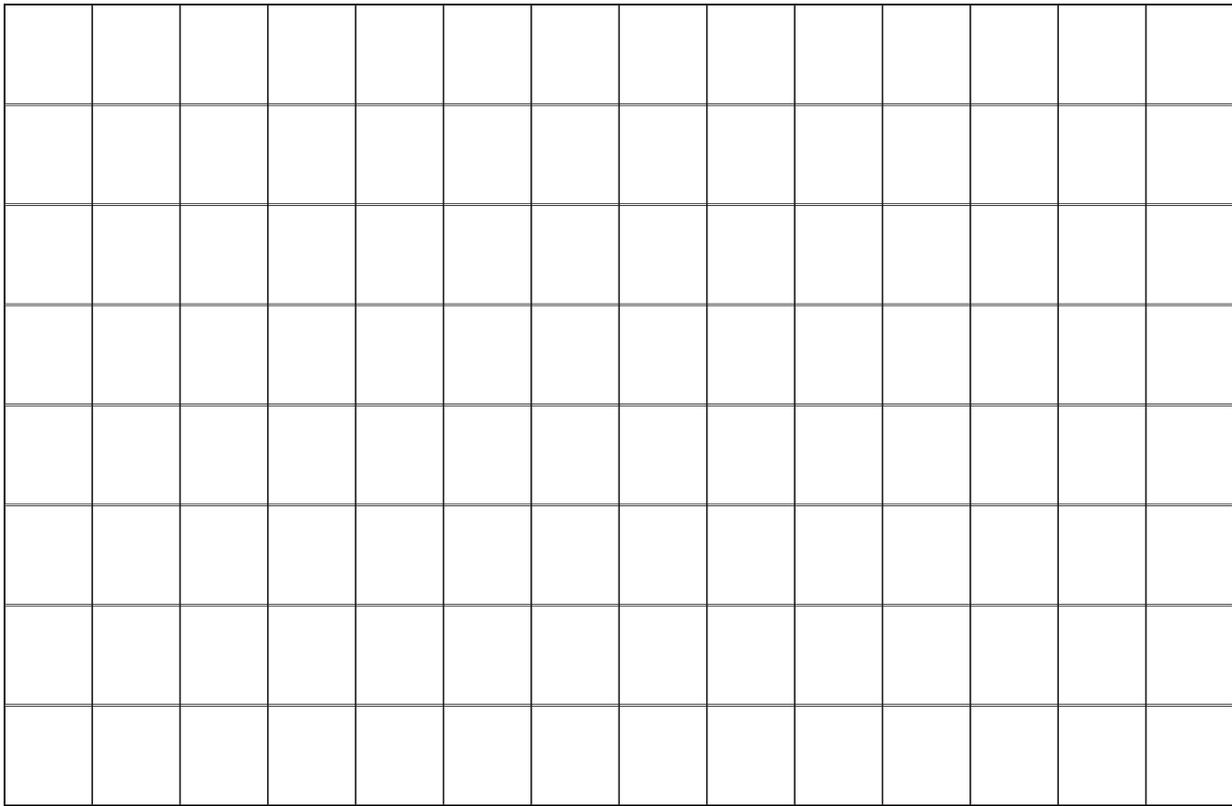
名前



名前







5. DLA <聴く> 映像 (DVD) スクリプト

1 「えんそく」

皆さん、遠足って知っていますか。(遠足の絵を見せて) 遠足ですよ。

明日、遠足に行きます。(さくら山の絵を見せて) さくら山です。さくら山に行きます。(バスの絵を見せて) バスで行きますよ。みんなでさくら山に登りましょう。

2 「うんどうかい」

皆さん、明日は運動会です。(運動会の絵を見せて) 運動会ですよ。(徒競走・玉入れの絵を見せて) 走ります。80メートル走ります。(体育の服装の絵を見せて) 体育の服で学校へ来てください。(給食の絵を見せて) 明日は土曜日ですが、給食があります。(片手を勢いよく高く上げて) みんな、頑張りましょう。

3 「工場見学」

皆さん、これを見てください。(自動車工場の絵を見せて) これは、どこですか。ここで自動車を作ります。そうですね、自動車の工場ですね。来週、自動車の工場に見学に行きます。(持ち物の絵を見せて) 持ち物は、お弁当、水筒、それから、ノートと鉛筆です。工場の人のお話をよく聞いてくださいね。

4 「えんそくのおしらせ」

はい。では、うしろまでプリントいきましたかね。はい。では、説明をします。えー、このお手紙は遠足のお知らせです。よく見てください。では、ちょっとみんなに質問してみようかな。遠足に行くのはいつですか。はい、あたりー。5月10日木曜日です。5月10日木曜日に遠足に行きます。では、次の質問。場所はどこですか。おー正解。はい。大山公園に行きます。大山公園には、大山がありますよね。そう、大山に登ります、登ります。はい。えー大山公園、大山、高さどれくらいか知っていますか。もっと、もっともっと。あー、600メートルね、あるんですね。そこの頂上からは晴れていれば海が見えます。先生もあそこの海とっても楽しみなので、みんなも晴れたら海が見えると思います。楽しみにして頑張って登りましょうね。

はい。続いて、出発は9時。みんなはいつも通り学校に登校します。ただし、ランドセルじゃありませんよ。リュックで来てくださいね。はい。持ち物はリュック。それから中にはお弁当、水筒、それから頂上でお弁当を食べるので、その敷くレジャーシートがあるといいと思いますね。それを持ってきてください。えー、お弁当、水筒、シート。それから帰りはだいたい3時くらいになります。3時くらいに帰ってきますので、このお手紙と一緒にうちのの人によくお伝えしてください。はい。それではこのお知らせのお話はこれでおしまいです。

5 「トマトのさいばい」

はい、みなさん。この写真を見てください。うん、そうです。トマト。ねー、真っ

赤ですね。トマト好きな人？ おー、いっぱいいる。苦手な人？ あー、これも結構いますね。はい。先生も小学生の時はトマト苦手でした。でも、すぐに好きになりましたね。みずみずしくて夏はおいしいなーって思って食べてました。

はい。それでは今日これからやることを説明します。これから外に行って、トマトの苗を植えます。そう、一人ひとつずつ。自分のトマトを育てましょう。

うん、楽しみだね。あ、そう。あの一、大きく育てて実がなったら、収穫してみんなで食べることもできますよ。はい。まず、外に出たら、先生が一人一人に鉢、植木鉢を渡します。そしたら、スコップで土を半分まで入れてください。

多すぎても少なすぎてもいけませんよ。半分まで土を入れてください。

そしたらそのあとで、トマトの苗をここに入れます。トマトの苗を真ん中に置いたら、またスコップで土を入れていきます。それでここまで、トマトの苗が隠れるここまで土を入れます。今日やることはここまでです。

でも、この先の話をちょっと説明します。花、そうトマトの花。ねえ、こんな色なんです。黄色。きれいですね。ここに実がなってますね。トマトの花です。

それからトマトが育ってきたら、棒をさします。ね、棒。何のために棒をさすのでしょうか。あ、そう、あたり。よく分かりましたね。そう。トマトはツルなので、こう横にね曲がって行っちゃう、倒れちゃうんですね。倒れないで、まっすぐ伸びてくださーいのために、棒を縦に立てます。それで、棒にツルをこう結んでおくんですね。そうすると、まっすぐ育っていきます。それから大事なこと。水ですね。はい。自分のトマトなので、自分で水をしっかりあげられるといいですね。はい。じょうろにくんで、水をこのようにあげていってください。

さあ、それではみんなで外に出て、実際にトマトの苗を植えてみましょう。

6「ごみの ゆくえ」

はい、ではこの写真をご覧ください。何の写真ですかね？ おお、あ、みんな、そうね、さすがですね。はい、ごみ収集車がごみを集めてるところですね。はい。え、では、この写真を見て何か気づくところ、ありますか。ふん、ああ、ヘルメットね。はい、作業の人がヘルメットをかぶっていますね。はい、それから？ ああ、長袖、長ズボン。ね、何で、何でヘルメットかぶって、長袖、長ズボンなんですか。うん、ああ、危険なんだ。危険な仕事、へえ、なるほどね。どんなふうに危険なんだろうね。うん、ああ、何、ビンが割れたりするの？ ああ、危ないんだ。ははあ。じゃ、ビンがこん中に入ってるの？ えっ、入ってない？ はっ、ふうん、じゃ、このごみは…紙屑。じゃ、じゃ危なくないじゃん。あ、でも危ないんだ。なるほどね。さあ、実際どうなんですか。

では、今日はこのごみの行方という勉強をしたいと思います。え、では、まずみんな、ええと、おうちで、1週間ごみ調べの勉強をしてきましたね。調べたごみについてちょっと話してもらいたいなって思います。はい。おうちではどんなごみが出ましたか。はい、あ、紙くず。ね、紙屑さつき出ましたね。はい、紙屑。それから？ うん、あ、生ごみ。それから？ 生ごみね。生ごみ、出ますね。生ごみね、それから？ うん、新聞、ちらし、いっぱい出ますね。古新聞、それから？ あ、ペットボトル、

です。先生のうちもね、ペットボトルいっぱい出ます。はい、ペットボトル。ね、いろんなごみが出ますね。

はい、じゃ、このごみ、どこに持ってくるの？ うん、ごみ収集車に積んで…え、海に捨てに行くの？ ううん、あっ、違う。ううん、あっ、燃やす。燃やすのね。全部燃やすんだ、これ、全部、バアーっと。全部どっか持って行って燃やすんだ。うん、あっ、はあ、ペットボトルは燃やさない。古新聞も燃やさない。あ、じゃ、この2つは燃やす（古新聞・生ごみを指して）。こっちは燃やさない。なるほどね。はい、さあ、実際どうなんでしょうか。

じゃ、次の質問。これ、ごみ、どこに持っていくんでしょう。うん、どこ？

では、このごみ、ね、このごみ収集車に乗ってどこに行くんでしょう？ どこ？ は、はあ、はあ、大体あたりですね。ええ、こう言います。ごみ処理センター。はい、これらのごみは、ごみ処理センターに持っていきます。はい。では、今日はこのごみは、ごみ処理センターに運ばれて、それでどうなるのかということをお勉強したいと思います。

7 「エネルギー」

はい、それでは、このグラフを見てください。これは、今から35年以上前。先生がもう小さい時ですね。1975年の日本の電力を作る時のエネルギー源の割合のグラフです。さあ、何か気付いたことがありますか。うん。はい。石油、62.1%。ね。石油を使って電気をほとんど作っていたんですね。それから、水力、原子力、天然ガス、石炭というふうが続いていました。はい。ところが、こんなに石油に頼っていたののかなあ、っていう話になりました。なぜなら、オイルショックというのがあったんですね。それで、この62.1%を占めている石油がもし日本に来なくなったら、大変なことになる。ということになりまして、この後、日本はこの割合を変化させていきます。どのようになったか。

今から5年、6年前、2006年はこのようになりました。はい。さあ、何か気付いたことある人？ うん、そうだね。石油が7.8%。減りましたね。それから水力、石炭、天然ガスを使って、一番多いのは？ そう原子力です。30.5%。ただし、ね、みなさんもご存知のように、あの東日本大震災で、原子力発電所が事故に遭ってしまいました。もう原子力は使えないかもしれない。さあそうなったら、この30.5%、どうなっちゃうんでしょう。ですので、今、電気を使わないように省エネだよっていう話が盛んに言われております。

さあ、今後日本は、この原子力で電気を起こせないとしたら、どうしたらいいんだろうか。それを考えていくのが、このエネルギーの勉強です。ね。どうしたらいいと思う？ うーん、どうしよう。ま、ヒントをちょっと差し上げます。これを見てください。

これは、日本と同じ、島国。ね、アイスランドのエネルギー源の割合です。同じく2006年。はい、気付いたこと。うん、そうだね。地熱・太陽・風力、60.7%。かなりを占めています。それから。石油、水力、石炭などを使って電気を作っている。ということですね。

さあ、それでは今後日本はどのようにエネルギーを使っていったらいいんだろうか。
さあ、それをこれから勉強していきたいと思います。

8 「^{じしん}地震」

皆さん、ええ、今日から新しい勉強が始まります。テーマは地震です。

日本は地震が多い国なんです。昔から、あちこちで大きな地震が起きています。そうそう、昨日の夜も強い地震がありましたよね。先生の家では、本棚の本が落ちてきました。皆さんの家ではどうでしたか。夕べの地震がどのくらいだったか、ニュースで聞いた人、いますか。はい、そうですね、この辺は震度4って言ってましたね。

ところで、地震のニュースではよく震度とか、マグニチュードって言葉を聴きますね。どんな意味だかわかる人いますか。ふうん、震度は、どのくらい揺れたか、地震の揺れの大きさ…その通り。震度は、地震の揺れの大きさを表しているんですね。じゃあ、マグニチュードは？ ううん、これはちょっと難しいかな。マグニチュードは、地震のエネルギーの大きさを表しているんです。

地震の強さを表すのに、二つの言葉が使われているんですね。今日は、このうちの、震度について勉強します。震度は、今言ったように、地震の揺れの大きさを表しているんですね。震度は、震度計という機械で測ります（**震度計**）。夕べの震度は4でしたが、この震度って、いったいいくつに分かれているか、知ってますか。えっ、20？ いや、そんなに多くはないなあ。ええ、教科書の32ページを開けてください。そこにある震度表を見てください。（**震度表**）震度0から始まって、震度1、2、3、4とだんだん強くなっていきます。震度5と震度6は、それぞれ弱い、強いのもつあります。震度5の弱い地震、震度5の強い地震というように。そして、最後は震度7。全部で10に分かれていますね。ええと、例えばですね、震度1は、「建物の中にいる人の一部が、揺れを感じる。」って書いてありますね。夕べの地震は震度4でしたね。震度4は、「眠っている人のほとんどが目覚ますような地震。」って書いてあります。ええ、結構強い地震だったことがわかりますね。

さあ、その次に進みます。ええ、地震は地球の内部で起こります。地震が起こると、揺れが地面の中を伝わっていきますね。次に、それがどう伝わっていくのか、地震の揺れの伝わり方を見てみましょう。ええ、これは地震計といいます。地震の揺れを記録する道具です（**地震計**の写真）。この地震計の記録を見てください（地震計の記録を指して）。これを見て、何か気がついたことはありませんか。うん、どうですか。そうですね、ほら、最初は揺れが弱いですね。でも、後から大きな揺れがきていますね。そうなんですね。地震は、最初に弱い揺れがやって来て、その後に強い、大きな揺れがやってくる。これが地震の揺れの特徴なんです。

さあ、それが書いてあるところを読んでみましょう。34ページを開けてください。

6. DLA <聴く> 視覚補助教材 (キーワード)

イラスト1 えんそく

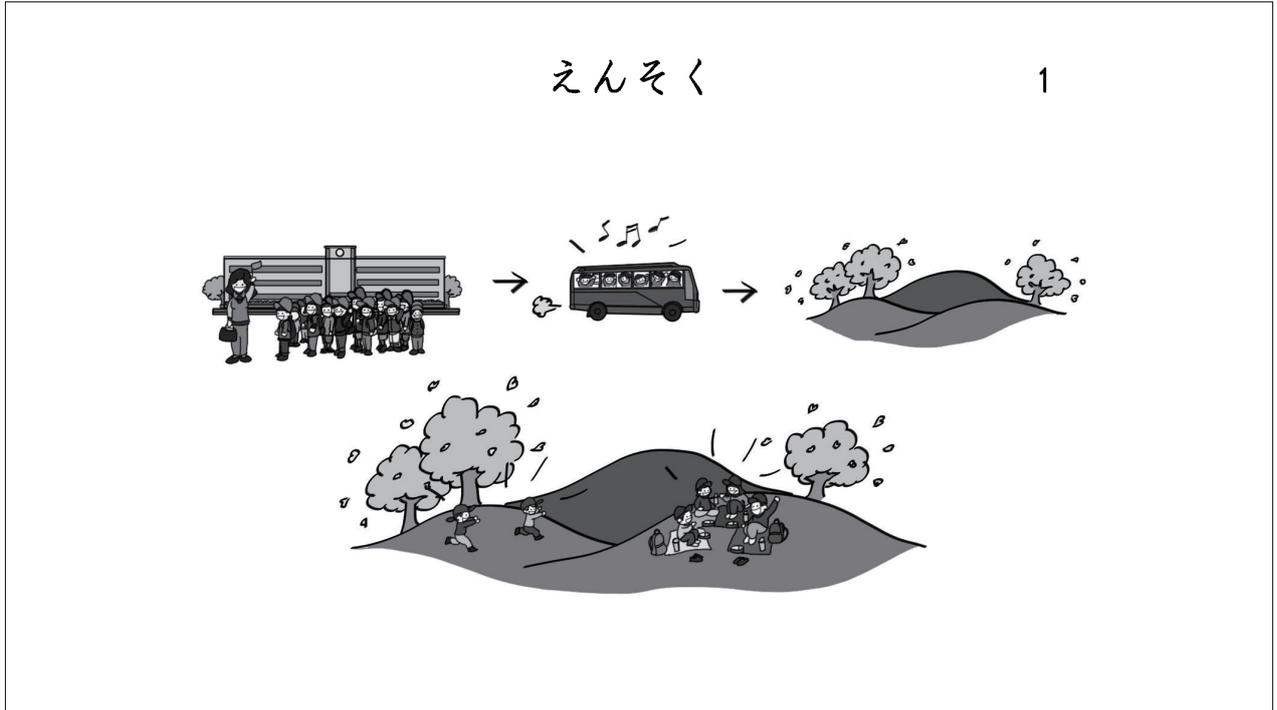
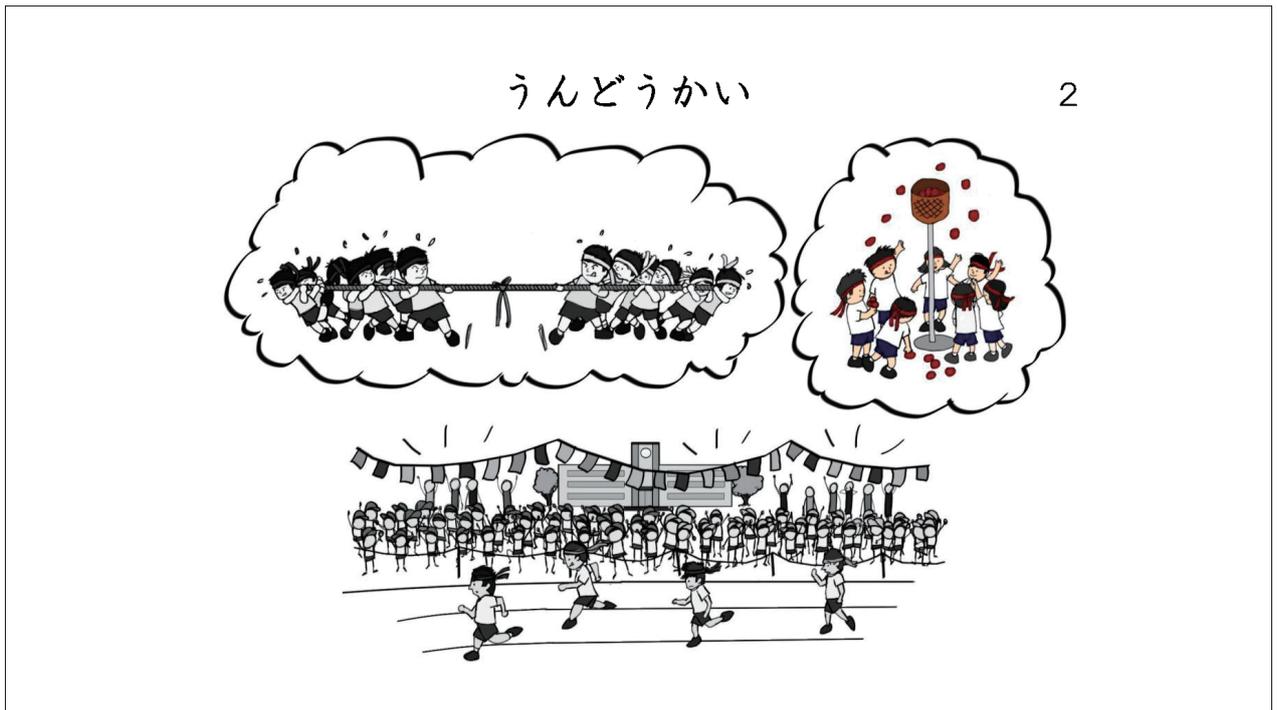
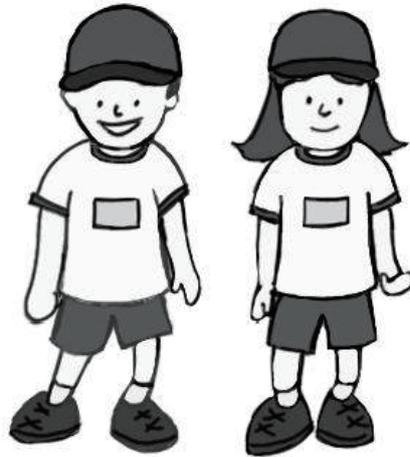


イラスト2 うんどうかい



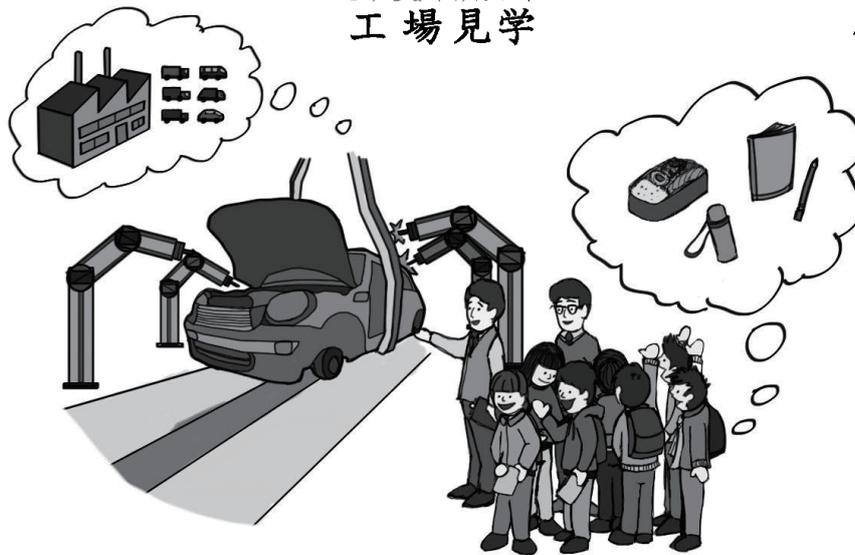
たいいくの ふく

3



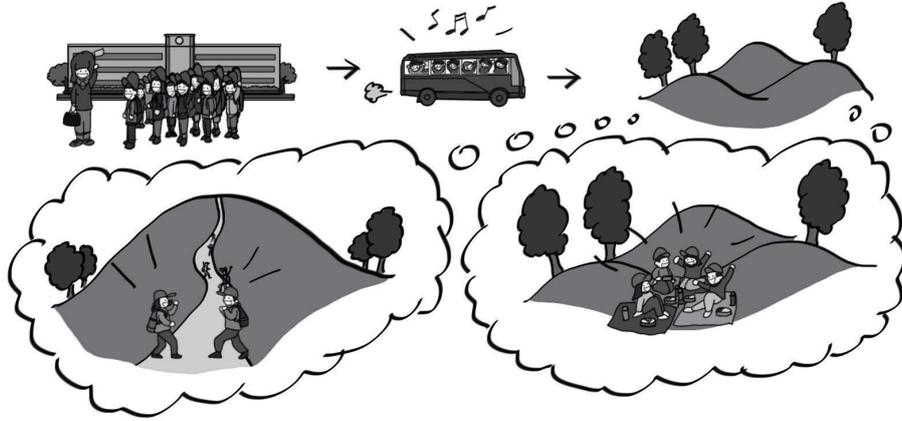
こうじょうけんがく 工場見学

4



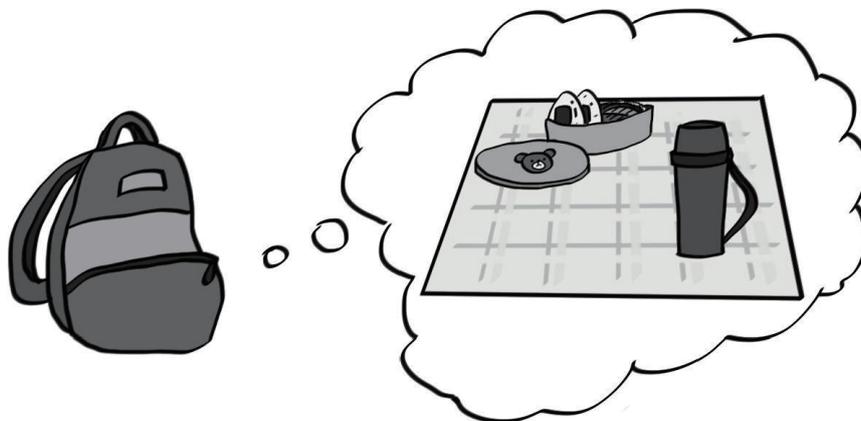
えんそくのおしらせ

5



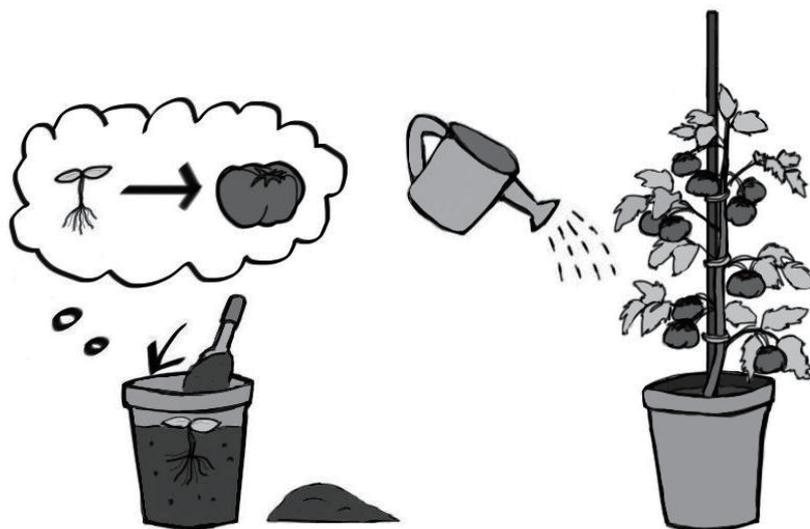
もちもの

6



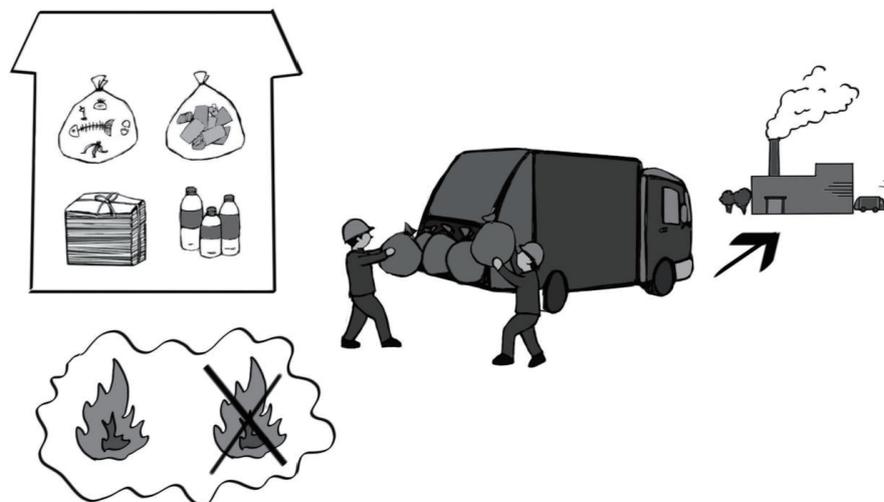
トマトの さいばい

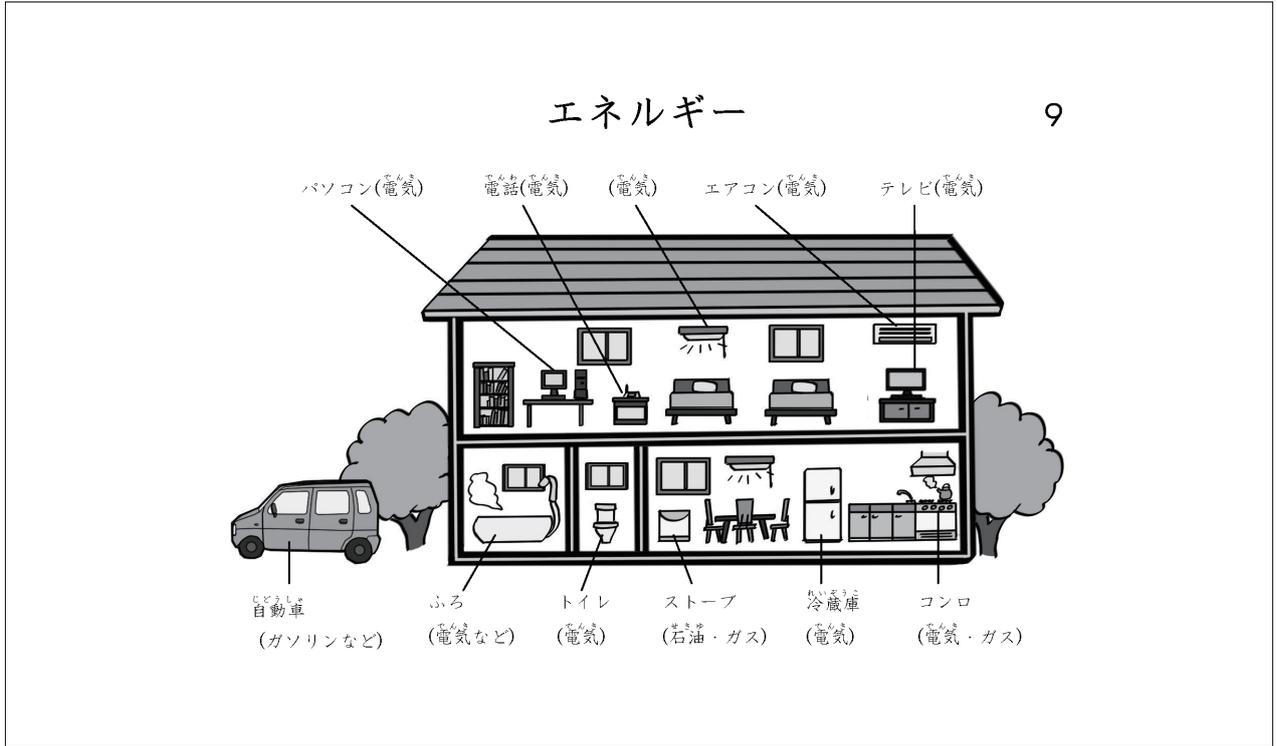
7



ごみの ゆくえ

8





げん エネルギーとエネルギー源 10

エネルギー源	エネルギー
<p>せきゆ 石油 せきたん 石炭 すいりょく 水力 かりょく 火力 げんしりょく 原子力 たいよう 太陽熱 ふうりょく 風力など</p>	<p>でんき 電気</p> <p>ガソリン とうゆ 灯油 ガス</p>
<p>せきゆ 石油 てんぜん 天然ガス</p>	

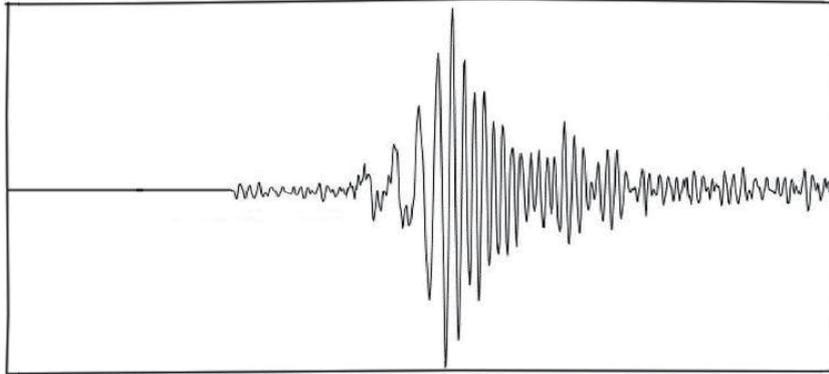
しんどうひょう
震度表 11

震度0	人はゆれを感じない。	
震度1	建物の中にいる人の一部がゆれを感じる。	
震度2	建物の中にいる人の多くが、ゆれを感じる。ねむっている人の一部が目さします。	
震度3	建物の中にいる人のほとんどが、ゆれを感じる。こわいと思う人もいる。	
震度4	かなりの人がこわいと思う。ねむっている人のほとんどが目さします。	
震度5弱	たなにあるものが落ちることがある。	
震度5強	とてもこわいと思う。たなにあるものが多く落ちる。	
震度6弱	立っていることができない。へやに置いてある家具の多くが動いたり倒れたりする。	
震度6強	へやに置いてある重い家具のほとんどが動いたり倒れたりする。	
震度7	自分ではどうすることもできない。家の中の家具が大きく動き、飛ぶものもある。古い家は倒れることもある。	

イラスト 12 地震のゆれ

じしん
地震のゆれ

12



「テスト設計・言語発達一般」に関する質問

Q 1. なぜ「対話型」で測定するのですか。ペーパーテストではだめですか。

A 従来型のペーパーテストでは、文化的、言語的に多様な背景を持つ子どもの力は、なかなか測れません。また、紙筆テストでは潜在的な力を測るには十分ではありません。ただ現場では、日頃の指導を通して、子どもがどのくらい理解しているのかを知る必要があります。潜在的な能力は、対話を通して引き出すのが一番です。対話によって、子ども自身が学びつつある自分に気づき、それが自信にもつながります。また、学習に対する興味や意欲をかき立てるには、指導者との関係作りが必要ですし、指導者の励ましや助言が必要です。そのためにも、対話を重視しています。

Q 2. 外国人児童生徒の日本語力と日本人児童生徒の日本語力はどこが違うのでしょうか。どのくらいで、またどうすれば日本人児童生徒に追いつくのでしょうか。

A JSL 児の日本語力は、何歳で日本に来たか（入国年齢）、何年くらい日本にいるか（滞日年数）、母語（あるいは第一言語）がどのくらい伸びているかによって異なります。日本語の習得が速いのは、母語がしっかりしていて、母語で教科学習の経験がある子どもです。それでも話すかに約2年、読み書きに5年かかると言われます。逆に日本生まれや幼児期に来日した子どもは、日本語力に問題がないと思われがちですが、実は問題があり、日常会話は流暢でも、読解力や作文力の獲得に5年から10年かかると言われます。母語の下支えがある場合は5年、ない場合は10年かかるといことです。また、追いつくと言っても日本人児童と全く同じ力を持つわけではないので、義務教育が終わってからも何らかの支援が必要です。

Q 3. 滞日年数が4大要因の1つということですが、滞日年数とJSL 参照枠のステージとはどんな関係があるのでしょうか。

A 各ステージにほぼ1年かかると思ったらいいでしょう。つまり授業参加ができるのは、ステージ5ですが、ステージ5に達するのに5年くらいかかるといことです。ただ、日本語学習の開始年齢が高ければ高いほど、母語力の下支えがあるため、ステージ1から3の習得が速くなります。逆に日本生まれや幼児期に来日した子は、話す力はステージ4でも、読みと書きの習得に非常に時間がかかるといった方がいいでしょう。

Q 4. 入国年齢は、日本語の習得とどのような関係がありますか。

A 入国年齢が高い子どもの方が、母語の力が強い上に学校経験も豊かですから、教科学習に必要な言語能力の獲得が速いのです。しかし、入国年齢と直接強い関係があるのは、母語の保持と伸長です。年齢相応の母語力を持って来日した場合は、日本語を習得しつつ母語も保持することが可能ですが、母語が未熟なまま、日本語環境に置かれた低学年児童の場合は、日本語力と母語力が競い合うことになり、母語があっという間に弱まっていきます。そうになると、家で親が母語で話しかけても日本語で応答するという、シグザグのコミュニケーションスタイルになり、親子関係に大きな亀裂を生じます。つまり、じっくり話し合う共通の

言葉がなくなってしまうのです。ですから、日本生まれや、幼児期に来日した子どもには、保護者に家庭で母語を率先して使うように勧めると同時に、学校全体で「日本語も大事、母語も大事」というメッセージを子どもに伝え、「母語も出来る子」という誇りやアイデンティティが早くから育つようにする必要があります。

Q 5. 支援の段階を知るために、「JSL 評価参照枠〈全体〉」(8 頁)を参照したり、「DLA 採点表〈全体評価〉」(140 頁)に記入したりすることになっていますが、全ての DLA を一度にしなければならないのですか。

A いいえ。子どもの日本語力は会話力を基礎にして段階的に伸びていくと言われています。まずは、会話力がしっかりと身についたかどうか測定してください。その上で、聴く力を DLA〈聴く〉の DVD の A (初歩レベル) を使って、まとまりのある話が聴けるかどうか測定します。また、文字の読み書き能力が一定程度進んだ段階になって、DLA〈読む〉を実施してください。そして、DLA〈書く〉でまとまりのある文章が書けるかどうかを測定してください。教科内容がどの程度わかるかを測定したい時に、DLA〈聴く〉の B (教科内容レベル) を聴かせて、日本語力を測定します。このように、子どもの日本語能力の伸びに合わせて段階的に実施することが大切です。一度に全ての DLA を実施して、日本語能力を測定するようなことはしないでください。

Q 6. 「母語で語彙力チェック」は、どうして必要なのですか。

A 理由が3つあります。第1は、母語の語彙力を調べることで、日本語力全体の伸びをある程度予測できることです。母語の語彙が豊富な子は、日本語の語彙の習得も早いのです。また語彙の力は話す力、読む力、書く力と密接な関係があるため、母語力全体の予測もある程度できるのです。第2は、言語習得が遅い場合、言語の力が弱いだけなのか、何らかの機能的障害や学習障害があるためか、見分けがつかせません。見分ける方法の一つは、両言語で同じテストをして、共通の問題があるかどうかを調べることです。障害がある場合は、同じような課題が日本語にも母語にも現れます。第3は、母語と日本語の力関係を見ることによって、ダブルリミテッド(母語でも日本語力でも年齢相応レベルに達しない学習困難児)の早期発見に繋がります。

Q 7. 日本生まれの子どもで、日本語を流暢に話すのですが、どうして授業についていけないのでしょうか。

A 日本生まれの JSL 児は、日常会話の力は育っても、教科授業に必要な語彙や読み書きの力が母語話者児童と同じようには育ちません。例えば日本語母語話者児童は、5,000 語近い語彙を持って小学校に上がってくるのですが、JSL 児は 100 語もないケースが多いのです。そういう場合、ひらがなやカタカナなど文字は覚えても、文を読むのに必要な語彙が足りないために意味がつかめません。また、授業や教科書で使われる語彙が、毎日使う日常語彙と違うことも、授業についていけない原因の一つです。このため、教科書用語などは、ていねいに教える必要があります。

Q 8. JSL 評価参照枠〈全体〉や個人指導記録は、学校運営や教育委員会に、どのように役立つのでしょうか。

A JSL 評価参照枠〈全体〉で、在籍の JSL 児童生徒がそれぞれの技能でどのレベルの支援を必要としているかが分かります。その情報が、学校運営や教育委員会に役に立ちます。学校全体、あるいは地

域全体で、どのレベルの支援がどのぐらい必要かという情報を踏まえて、教員の配属や予算の計上につなげることができるといえるでしょう。また「個人指導記録」に、評価の結果を記録していくことにより、指導教員の入れ替わりや転校の際に、指導の継続性を確保することが可能になります。

Q 9. 保護者も子どもの日本語習得について知りたがっています。保護者にはどのように伝えればよいのでしょうか。

A 母語語彙チェックの結果も含めて、四つの言語領域の習得状況を、そのまま保護者に知らせてあげるといいでしょう。技能別DLA評価やJSL評価参照枠<全体>は、担当教師や指導員が学習目標と子どもの習得状況について、具体的に説明するのに役立ちます。DLA<話す>やDLA<読む>の録画や、DLA<書く>で書いた作文なども、保護者に見せて、実際にどのぐらい日本語力が伸びているかを自分の目で確認してもらいたいでしょう。長い目で見て、子どもの母語と日本語力の両方を強めることが子どもの言語能力全体、また学力に大きなプラスになりますので、家では、保護者が母語を意図的に使用して母語力を強めることを勧めてください。母語を伸ばすことが、ゆくゆくは日本語力を強めることにもつながるのだ、という点を強調するといいでしょう。

<はじめの一步>に関する質問

Q 10. <はじめの一步>を終えるだけで1人20分~30分かかってしまいました。早見せで次へ行ってもいいのでしょうか。それともしっかり答えを待つのでしょうか。

A <はじめの一步>は口慣らし、ウォームアップです。余り時間をかけないで、テンポよくさらっと済ませるように心がけてください。

Q 11. いつも勉強を教えている児童生徒の場合は、<導入会話>の自己紹介はなくてもいいのでしょうか。

A はい、省略しても構いません。柔軟に対応してください。また自己紹介だけでなく、既にわかっている内容は省略していいのです。ただし、「今日は知らない人になっていろいろ質問するから、答えてくださいね」という指示を出して、<導入会話>を全部やってもらうという選択もあります。

Q 12. 語彙チェックで、普段使われないような語彙も含まれていました。どうしてこの55問を選んだのでしょうか。

A 13の領域から複数の語彙を選んでいきます。領域とは、例えば、体の部分、食べ物、動植物、機器、家の一部、職業、乗り物、学校生活の動作、仕事の動作、感情、形状などです。その中で、全体の名称とその一部(局部)の名称を対比して入れてあります。例えば、手と指、机と引き出し、木と枝などです。習得論の立場から、全体名称の方を先に習得する、そして忘れるときは局部名称を先に喪失する、という仮説に基づいて作成してあるものです。さらに品詞では、名詞、動詞、形容詞が入れてあります。

「DLA〈話す〉」の実施に関する質問

Q 13. 少し説明すると思い出すことが多かったのですが、数秒待って答えが出なければ「できない」としたほうがよかったですでしょうか。

A まずじっくり待ってあげることが大事です。それでも答えがでなければ「できない」と判断したらどうでしょうか。多種多様なタスクを数多く与えることによって、総合的にどのぐらい話す力があるかを判断するので、1つの問題にあまり時間をかけずにつぎのタスクに移ったほうがいいでしょう。

Q 14. 標準語ではなく、地域語で話した子どもの話す力の評価はどうなりますか。

A 話す力の評価は、地域語あるいは標準語という基準で区別して評価されるものではありません。ただほかの地域からの編入生で、母語の影響なのか、その地域語の影響なのか分からないこともあります。その場合は、詳しい事情はあとで調べることにして、その場ではすべてを肯定的に受け止めることが大事です。

Q 15. 日本語で聞いているのに、母語で答えた場合は、どうすればいいですか。

A まずは、「日本語で言ってみてください」とやさしく促してください。ただ、来日したばかりで、日本語体験が浅い子どもには、「母語で答える」というサバイバル方略を取る子どももいます。そのような場合でも、まず「日本語ではなしてください」と促してください。それでも母語で通そうとしたら、「DLA〈話す〉」の評価はまだ無理だということで、そこでDLAを終了してください。

Q 16. 実施者の日本語が理解できないのか、それは分かっているが、応答ができないのか分からないときは、どうすればいいですか。

A 一度の説明や質問が理解できない場合もあります。3回までは繰り返し同じ言い方で話しかけてください。それでもわからない場合は、つぎのタスクに移ってください。ただ3回繰り返しても応答がなかったということは、日本語力の判定に役立ちますから、記録に残しておいてください。

「DLA〈読む〉」の実施に関する質問

Q 17. ある程度理解していても表現力が乏しい場合、うまく自分の言葉で説明できていなければ、やはり「読む力」がない、ということになるのでしょうか。

A 表現力のテストではないので、あくまで内容が理解できているかどうかで判断します。つまり、評価者が子どもが表現したことを通して、読みの理解度を推察するということです。ただ母語の話す力の

ほうが明らかに強く、また子どもがそう望む場合は、「DLA〈読む〉」を終了した段階で、母語で話すように促してもかまいません。後で、母語がわかる人に録音データを聞いてもらおうとよいでしょう。

Q 18. 物語の再生で、すらすら答えるのですが、読んだ内容ではなく、自分の想像で答えている場合があります。そのようなときには、どのように対処しますか。

A 子どもが話している最中は否定せず、最後まで聞き、受け止めます。評価をする際は、自分の想像で答えた部分がテキストの内容と違っていれば、その内容を十分に理解していなかったと判断します。指導においては、予測・推測力は読解において大切な力ですので、その力を認めつつ、細部の内容にもよく注意を向けるように指導するとよいでしょう。子どもは、読んだ内容ではなく、テキストのイラストなどから自分なりに内容を想像してしまうことがよくあり、特にそれが習慣になっている子どもにはいけない指導が必要です。

Q 19. 読むことに興味はあるようですが、漢字がネックになってすらすら読めない子どもには、どうしますか。

A 「漢字がわからなければその場で教える」ということを、まず、しっかり子どもに伝えます。それでも選択したテキストが読み進められない場合は、テキストのレベルを下げます。

Q 20. すらすら読めるのですが、内容を全くと言っていいほど理解していない場合があります。そのような場合は、どのように対処したらいいでしょうか。

A 確かにすらすら読んでいても、文字を追っているだけで、内容についてはほとんど答えられない子どもがいます。「字面読み」とでも言えるような、この読み方は、実は1970年代から先住民や移住者の子どもの課題とされてきました。幼児期の言語環境が貧しいことと関係があります。例えば、絵本の読み聞かせをしてもらった幼児は、文字の背後に面白いストーリーがあることを知っていますが、そのような経験がなかった子どもは、1年生になって文字を習って本を読むようになると、テキストのはじめの文字から最後の文字まで読むことが、「読む」ことだと認識するようです。では、このような子どもにどう対処するかということですが、短期間でも幼児期に戻って、「絵本をいっしょに読んで、その内容について話し合う」という活動を取り入れるといいでしょう。

「DLA〈書く〉」の実施に関する質問

Q 21. 質問を多くすれば、児童生徒がもっと書けるようになると感じたのですが、指導的な助言や質問をしてもいいのでしょうか。

A こうしたら書けそうという質問・声かけはどしどししてあげてください。その際は、助言を「与える」のではなく、「引き出す」ための質問をたくさんしてください。質問されたことについては答えてかまいません。子どもが自分で考える前に先回りしないようにだけ、留意してください。

Q 22. 児童生徒が文章を書くときに、どこまで文章が成り立つように支援すればいいのでしょうか。

A 支援は求められた時に与えるようにしてください。自力でどこまで書けるのかを見るのが、アセスメントの一つの目的です。支援者に全面的に頼ってしまう状況は避けるように心がけてください。

Q 23. 文章を書くときに児童生徒が書けなかったので、話しながら一緒に文章を作り、それを写すことでとりあえずは書いたのですが、このような方法でいいのでしょうか。

A やり方としては可能ですが、「一緒に文章を作る」際に、支援者が先回りして文を言ってしまうと、子どもの作文力が測れません。子どもにまず話させ、それを文字にするようにしてください。支援者の役割は、子どもから発話を引き出すことです。

Q 24. 簡単に書いて済ませる子や書く内容をよく考えてから取り掛かる子など、様々な子がいます。与えられたテーマの作文で本当の日本語力が測れるのでしょうか。

A もちろん、一つのテーマの作文だけで日本語力の全ての面を測ることはできません。子どもの様々な面を総合的に見て初めて日本語力の総体がわかります。DLA では、出来上がった作文だけでなく、作文に取り組む姿勢(書く態度)も作文力の一部として評価し、また、対話によって潜在的な力を測ります。簡単に書いて済ませる子に対しては、書いたあとの対話の中で、よりよい取り組み方へのヒントを自覚できることが望ましく、それが作文指導へのヒントとなるでしょう。

Q 25. 用紙を選ばせるとありますが、ほかの用紙を使わせてもいいのでしょうか。

A はい、用紙は何を使ってもかまいません。巻末資料 4. に用意したのは、まず書くことへの意欲を高めること、そして原稿用紙が使えない低学年の子どもに、年齢に適した升目の用紙を提供するためです。

「DLA〈聴く〉」に関する質問

Q 26. DVD を見せるときに、A を見せて内容が理解できていたら B の DVD も見せていいのでしょうか。それとも、片方の DVD しか見せないのでしょうか。

A 児童生徒の聴く力をより適正に測るために、基本的には、A、B の 2 種類の DVD を聴かせることをお勧めします。しかし、ふだんの観察から A が不要と判断されたら、B から始めてもかまいません。B の聴解用 DVD を使用する場合は、まず、年齢より一段、または二段下の DVD を聴かせた方がよいでしょう。それらが理解できるようであれば、段階を上げて聴かせてみましょう。(実践編・第 6 章「DLA〈聴く〉概要」p105 参照)。

Q 27. 1回のテストで児童生徒の聴く力が測れるのでしょうか。DVD の話題により聴き取れること、聴き取れないこともあるのではないのでしょうか。

A 実際には、短い聴解用 DVD を 1 本聴かせて児童生徒の聴く力のすべてを測ることは難しいことです。児童生徒の聴解力、授業の参加の可能性を見るためには、聴解用 DVD を一つのモデルとしていただき、教室での実際の授業でも同じような観察をしていただくことをお勧めします。本測定の診断結果は参考としてお使いください。

Q 28. 対話型で聴く力が測れるのでしょうか。話す能力の測定にならないのでしょうか。

A 「DLA〈聴く〉」では、児童生徒に聴解用 DVD を見せ、その後でどんな話だったか内容を言わせたり、それについて感想や意見を言わせたりして、児童生徒がどの程度内容を理解したか測定します。話す力のチェックでも、暗記チェックではないので、話の大筋が言えれば良しとします。実際児童生徒の話す力にはばらつきがあり、答える時も文にはならず単語で答える等レベルは様々です。実践ガイドには、あらかじめ話の大筋をまとめたチェックリストが載せてあります。重要と思われる語や表現には下線が引いてあります。文で答えられない場合も、それらの重要な語が言えれば理解できていると考えます。

Q 29. 一度で聴き取れず、もう一度聴きたいと子どもが言ったら、2度見せてもいいのでしょうか。

A 原則的には、聴解用 DVD は 1 回のみ見せます。実施に当たっては、突発的なことが起こることも考えられます。また、高学年でメモ取りに夢中になり聴くことに問題が生じた場合などは、教師の判断で再度聴かせてください。そういうケース以外は、もう一度みたいと言っても、1 度しか見せません。ただし、1 回視聴した後に、内容に興味を持ち、もう一度聴きたいというのは、「聴解行動」の評価対象となり、高く評価できます（実践編・第 6 章「DLA」〈聴く〉「1. 〈聴く〉概要」p105 参照）

Q 30. 未習語彙が多いせいか、ほとんど理解できなかったようです。そのような場合はどうしたらいいのでしょうか。

A 「DLA〈聴く〉」では、まず、聴解用 DVD を視聴する前に、視聴覚補助教材を使ってテーマ、キーワードを確認します。そのうえで、どのくらい理解できるか判定します。聴解用 DVD の視聴後に、言葉の意味を質問されたら児童生徒がわかるように説明してください。B（教科のテーマに関わる内容の聴解用 DVD）を聴いて、内容がほとんど理解できていないようであれば、年齢より一段、または二段下の DVD を聴かせてください。それでも、理解が難しい場合は、A（初歩レベル）の DVD を聴かせてみてください。

主要参考文献

- 伊東祐郎 (1999) 「外国人児童生徒に対する日本語教育の現状と課題」『日本語教育』100号記念号 pp.33-44 日本語教育学会
- 井上恵子 (2009) 『外国から子どもたちと共に 改訂版』本の泉社
- カナダ日本語教育振興会 (2000/2012) 『子どもの会話力の見方と評価-バイリンガル会話テスト(OBC)の開発-』カナダ日本語教育振興会 抜粋版「OBCワークショップ資料集」(k.nakajima@utoronto.caより入手可能)
- 外国人子女の日本語指導に関する調査研究協力者会議 (1998) 『外国人子女の日本語指導に関する調査研究《最終報告書》』東京外国語大学
- 川上郁雄編著 (2006) 『「移動する子どもたち」と日本語教育—日本語を母語としない子どもへのことばの教育を考える』明石書店
- 川上郁雄・石井恵理子・池上摩希子・齋藤ひろみ・野山広編 (2009) 『「移動する子どもたち」のことばの教育を創造する—ESL教育とJSL教育の共振—』ココ出版
- 国立国語研究所 (1956) 『小学校低学年の読み書き能力』秀英出版
- 国立国語研究所 (1958) 『小学校中学年の読み書き能力』秀英出版
- 国立国語研究所 (1960) 『小学校高学年の読み書き能力』秀英出版
- 国立国語研究所 (1972) 『幼児の読み書き能力』東京書籍
- 国立国語研究所 (2009) 『教育基本語彙の基本的研究』(国立国語研究所報告 127)増補改訂版 明治書院
- 小林幸江・横田淳子・鈴木孝恵 (1999) 「外国人児童に対する日本語教育の語彙調査」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』25号 pp.17-32 東京外国語大学
- コリン・ベーカー著、岡秀夫訳 (1996) 『バイリンガル教育と第二言語習得』大修館書店
- 齋藤ひろみ編 (2011) 『外国人児童生徒のための支援ガイドブック—子どもたちのライフコースによりそって—』凡人社
- 櫻井千穂 (2013) 「言語的マイノリティの子どもたちのバイリンガル読書力の発達」大阪大学大学院言語文化研究科博士論文
- 佐藤郡衛・齋藤ひろみ・高木光太郎 (2005) 『小学校 JSL カリキュラム「解説」』(外国人児童の「教科と日本語」シリーズ)スリーエーネットワーク
- ジム・カミンズ (2006) 「学校における言語の多様性—すべての児童生徒が学校で成功するための支援—」(中島和子・湯川笑子訳) www.mhb.jp/mhb_files/Cumminshanout.doc (ダウンロード可能)
- ジム・カミンズ (著)・中島和子 (訳著) (2011) 『言語マイノリティを支える教育』慶応義塾大学出版会
- JSL カリキュラム研究会・池上摩希子 (2005) 『小学校「JSL 算数科」の授業作り』(外国人児童の「教科と日本語」シリーズ)スリーエーネットワーク
- JSL カリキュラム研究会・大蔵守久 (2005) 『小学校「JSL 理科」の授業作り』(外国人児童の「教科と日本語」シリーズ)スリーエーネットワーク
- JSL カリキュラム研究会・齋藤ひろみ (2005) 『小学校「JSL 社会科」の授業作り』(外国人児童の「教科と日本語」シリーズ)スリーエーネットワーク
- JSL カリキュラム研究会・今澤悌・齋藤ひろみ・池上摩希子 (2005) 『小学校「JSL 国語科」の授業作り』(外国人児童の「教科と日本語」シリーズ)スリーエーネットワーク

- 東京外国語大学留学生日本語教育センター編 (1998) 『外国人児童生徒のための日本語指導
 <第1分冊>カリキュラム・ガイドラインと評価』ぎょうせい
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター編 (1998) 『外国人児童生徒のための日本語指導
 <第2分冊>算数(数学)・理科の教科書—語彙と漢字』ぎょうせい
- 中島和子 (1998) 『言葉と教育』海外子女教育振興財団
- 中島和子 (1998/2001) 『バイリンガル教育の方法』増補改訂版 アルク
- 中島和子 (2002) 「バイリンガル児の言語能力評価の観点—会話能力テスト OBC 開発を中心に」『多言語環境にある子どもの言語能力の評価(日本語教育ブックレット1)』国立国語研究所 26-44.
- 中島和子編著 (2011) 『マルチリンガル教育への招待—言語資源としての外国人・日本人年少者』ひつじ書房
- 中島和子・櫻井千穂 (2012) 『対話型読書力評価』(科研費(21320096)研究成果報告書)
 (k.nakajima@utoronto.caより入手可能)
- 文部省 (1992) 『にほんごをまなぼう』ぎょうせい
- 文部省 (1993) 『日本語を学ぼう 2』ぎょうせい
- 文部省 (1995) 『日本語を学ぼう 3』ぎょうせい
- 文部省 (1995) 『ようこそ日本の学校へ—日本語指導が必要な外国人児童生徒の指導資料—』
 ぎょうせい
- 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版社
- 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』東洋館出版社
- 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領』東京書籍
- 文部科学省 (2008) 『改訂版中学校学習指導要領解説国語編』
- 文部科学省国際教育課 (2003) 「『学校教育における JSL カリキュラムの開発について』(最終報告)小学校編」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001/008.htm
- 文部科学省国際教育課 (2007) 「学校教育における JSL カリキュラム(中学校編)」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001/011.htm
- 文部科学省国際教育課 (2011) 『外国人児童生徒受入れの手引き』
- 吉島茂・大橋理恵ほか (2004) 『外国語教育II—外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社

- Coelho, E. (2004). *Adding English: A guide to teaching in multilingual classrooms*. Don Mills, Ontario: Pippin.
- Cummins, J. (1991). Interdependence of first-and second-language proficiency in bilingual children. Bialystok, E. (ed.) *Language Processing in Bilingual Children*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cummins, J. (2000). *Language, Power and Pedagogy: Bilingual Children in the Crossfire*. Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Cummins, J. (2001). Assessment and Intervention with Culturally and Linguistical Diverse Learners. In Hurley, S.R.& Tinajero, J.V. (Eds.) *Literacy Assessment of Second Language Learners*. Needsham Heights, MA: Allyn & Bacon. 115-129.
- Cummins, J. (2007). Rethinking monolingual instructional strategies in multilingual classrooms. *Canadian Journal of Applied Linguistics*. Vol. 10, No.3, 221-240.

- Hill, B.C. (2001) *Developmental Continuums: A framework for literacy instruction and assessment K-8*, Norwood, MA: Christopher-Gordon.
- Organisation for Economic Co-operation and Development (OECD) (2006) *Where Immigrants Students Succeed: A Comparative Review of Performance and Engagement in PISA 2003*, OECD Publishing.
- Ontario Education (2005) *Many Roots Many Voices: Supporting English language learners in every classroom: A practical guide for Ontario Educators*.
<http://www.edu.gov.on.ca/eng/document/manyroots/manyroots.pdf>
- Ontario Education (2007) *English Language Learners and: ESL and ELD Programs and Services*. <http://216.187.93.167/downloadables/ELL%20Policy%202007.pdf>
- Ontario Education (2007) *The Ontario Curriculum Grades 9-12: English as a Second Language and English Literacy Development*.
<http://216.187.93.167/downloadables/esl912currb.pdf>
- Ontario Education (2009) *Supporting English Language Learners: A practical guide for Ontario educators. Grades 1-8*.
<http://216.187.93.167/downloadables/ELL%201%20-%208%20Ministry%20doc%20January%202009.pdf>
- Ontario Education (2009) *Supporting English Language Learners in Kindergarten*.
<http://216.187.93.167/downloadables/ELL%20Kindergarten.pdf>
- Ontario Education (2010) *Supporting English Language Learners with Limited Prior Schooling: A practical guide for Ontario educators. Grades 3-12*.
http://216.187.93.167/downloadables/ELL_LPS.pdf
- Ontario Education (2011) *Steps to English Proficiency (STEP): A Guide for Users*.
http://post.queensu.ca/~chengly/STEP_OngoingClassroomAssessmentContinua.pdf
- Thomas, W.P., & Collier, V.P. (2002). *A national study of school effectiveness for language minority students' long-term academic achievement*. Santa Cruz, CA: Center for Research on Education, Diversity & Excellence, University of California–Santa Cruz.
- WIDA Consortium (2007) *WIDA English Language Proficiency Standards and Resource Guide. Pre-K through Grade 12*. World-Class Instructional Design and Assessment Consortium.
<http://www.wida.us/standards/eld.aspx>
- WIDA Consortium (2012). *2012 Amplification of the English Language Development Standards: Kindergarten-Grade 12*. World-Class Instructional Design and Assessment Consortium.
<http://www.wida.us/standards/eld.aspx>

協力者一覧

<研究推進委員> [敬称略、五十音順]

- | | |
|---------|---|
| 安野 勝美 | 大阪府教育センター教育企画部人権教育研究室 主任指導主事
(H24.4~) |
| 石井 恵理子 | 東京女子大学 教授
(H23.9~) |
| ◎ 伊東 祐郎 | 東京外国語大学 教授 留学生日本語教育センター長 |
| 伊藤 卓哉 | 三重県教育委員会事務局小中学校教育課
学力向上推進グループ 副課長 |
| 井上 恵子 | 千葉県教育委員会 委嘱研究員・相談員 |
| 齋藤 ひろみ | 東京学芸大学 教授 |
| ○ 櫻井 千穂 | 大阪大学大学院言語文化研究科 博士課程
(H23.9~) |
| 佐藤 裕之 | 川崎市立宮崎小学校 校長 |
| 澤田 直子 | 浜松市教育委員会指導課教育相談支援センター 指導主事
(H23.4~) |
| 楠野 正人 | 浜松市教育委員会指導課教育相談支援センター
指導主事・教育相談グループ長
(H22.4~H23.3.31) |
| 倉島 義彦 | 上田市教育委員会学校教育課 課長
(H24.4~) |
| ○ 小林 幸江 | 東京外国語大学 留学生日本語教育センター 教授 |
| 篠原 政也 | 鈴鹿市教育委員会事務局人権教育課 課長
(H23.4~) |
| ○ 菅長 理恵 | 東京外国語大学 留学生日本語教育センター 准教授 |
| 鈴木 英文 | 鈴鹿市教育委員会事務局指導課 課長
(H22.9~H23.3.31) |
| 築樋 博子 | 豊橋市教育委員会学校教育課 外国人児童生徒教育相談員 |
| ☆ 中島 和子 | トロント大学 名誉教授
(H23.9~) |
| 中村 栄孝 | 上田市教育委員会学校教育課 課長
(H22.4~H24.3.31) |
| 古角 美之 | 兵庫県教育委員会事務局人権教育課 副課長 |
| 矢崎 満夫 | 静岡大学教職大学院 准教授 |

(◎委員長 ☆特別研究推進委員 ○ワーキングメンバー ※役職は委嘱時点のもの)

<モニター調査協力校>

千葉県千葉市立小中台小学校	愛知県豊橋市立野依小学校
千葉県千葉市立幸町第二中学校	愛知県豊橋市立玉川小学校
千葉県八千代市立村上北小学校	愛知県豊橋市立南陽中学校
千葉県八千代市立村上東中学校	愛知県豊橋市立豊岡中学校
千葉県市川市立新浜小学校	愛知県豊橋市立東部中学校
千葉県市川市立第七中学校	愛知県豊橋市立南陵中学校
千葉県市原市立白金小学校	愛知県豊橋市立青陵中学校
千葉県佐倉市立佐倉小学校	愛知県豊橋市立吉田方中学校
兵庫県立芦屋国際中等教育学校	愛知県豊橋市立豊城中学校
兵庫県神戸市立港島小学校	愛知県豊橋市立五並中学校
静岡県浜松市立葵が丘小学校	三重県鈴鹿市立長太小学校
静岡県浜松市立砂丘小学校	三重県鈴鹿市立飯野小学校
静岡県浜松市立瑞穂小学校	三重県鈴鹿市立牧田小学校
静岡県浜松市立大瀬小学校	三重県鈴鹿市立明生小学校
静岡県浜松市立入野小学校	三重県鈴鹿市立旭が丘小学校
静岡県浜松市立和田東小学校	三重県鈴鹿市立神戸小学校
静岡県浜松市立佐鳴台中学校	三重県鈴鹿市立清和小学校
長野県上田市立第一中学校	三重県鈴鹿市立河曲小学校
長野県上田市立第四中学校	三重県鈴鹿市立玉垣小学校
長野県上田市立東小学校	三重県鈴鹿市立一ノ宮小学校
長野県上田市立南小学校	三重県鈴鹿市立桜島小学校
長野県上田市立神川小学校	三重県鈴鹿市立白子小学校
岐阜県可児市立土田小学校	三重県鈴鹿市立椿小学校
岐阜県可児市立今渡南小学校	三重県鈴鹿市立平田野中学校
神奈川県川崎市立川崎小学校	三重県鈴鹿市立白子中学校
神奈川県川崎市立宮前小学校	三重県鈴鹿市立創徳中学校
神奈川県川崎市立川崎中学校	三重県鈴鹿市立千代崎中学校
神奈川県川崎市立富士見中学校	三重県鈴鹿市立神戸中学校
愛知県豊橋市立岩田小学校	大阪府松原市立松原南小学校
愛知県豊橋市立吉田方小学校	大阪府松原市立松原東小学校
愛知県豊橋市立旭小学校	大阪府松原市立恵我南小学校
愛知県豊橋市立大村小学校	大阪府東大阪市立池島小学校
愛知県豊橋市立岩西小学校	大阪府泉佐野市立第二小学校
愛知県豊橋市立富士見小学校	大阪府泉南市立鳴滝小学校
愛知県豊橋市立多米小学校	大阪府門真市立門真小学校
愛知県豊橋市立二川小学校	大阪府吹田市立第二中学校
愛知県豊橋市立羽根井小学校	

<聴解力ビデオ教材協力>

佐藤 莊二郎	神奈川県川崎市立宮前小学校
木脇 淑子	山口県萩市白水小学校
鎌田 勝之	埼玉県立上尾鷹の台高等学校 教頭

<サンプルビデオ撮影協力>

根津 眞寿美	愛知県知立市立知立東小学校
上出 仁美	大阪府八尾市立北山本小学校

<イラスト>

有本 昌代
Adam Gaudet

<編集協力>

大橋 めぐみ	文部科学省委託事業事務局
原 絵莉子	早稲田大学大学院日本語教育研究科 修士課程
松本 裕典	早稲田大学大学院日本語教育研究科 修士課程

平成 22 年度～平成 24 年度
「学校において利用可能な日本語能力の測定方法の開発」

Dialogic Language Assessment
for Japanese as a Second Language
外国人児童生徒のための
JSL 対話型アセスメント

発行日：平成 26（2014）年 1 月
発 行：文部科学省初等中等教育局国際教育課
住 所：〒100-8959 東京都千代田区霞が関 3-2-2
電 話：03-5253-4111（内線：2035）
編 集：東京外国語大学 留学生日本語教育センター
「外国人児童生徒の総合的な学習支援事業」
研究推進委員会

平成26年1月発行

発行 文部科学省初等中等教育局国際教育課

住所 〒100-8959 東京都千代田区霞が関 3-2-2

電話 03-5253-4111 (内線 2035)

E-mail kokukyo@mext.go.jp

URL http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/main7_a2.htm